

風俗奇譚

〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

昭和35年11月1日発行（毎月一回1日発行）
昭和35年8月30日国鉄東局特別換取証第1号

風俗奇譚

凌辱無残特集

昭和35年11月1日発行（毎月一回1日発行）
昭和35年8月30日国鉄東局特別換取証第1号



特集 戦争残虐の記録
アブ ひつふえんどはいひる
小説

11

凌辱無残特集

11

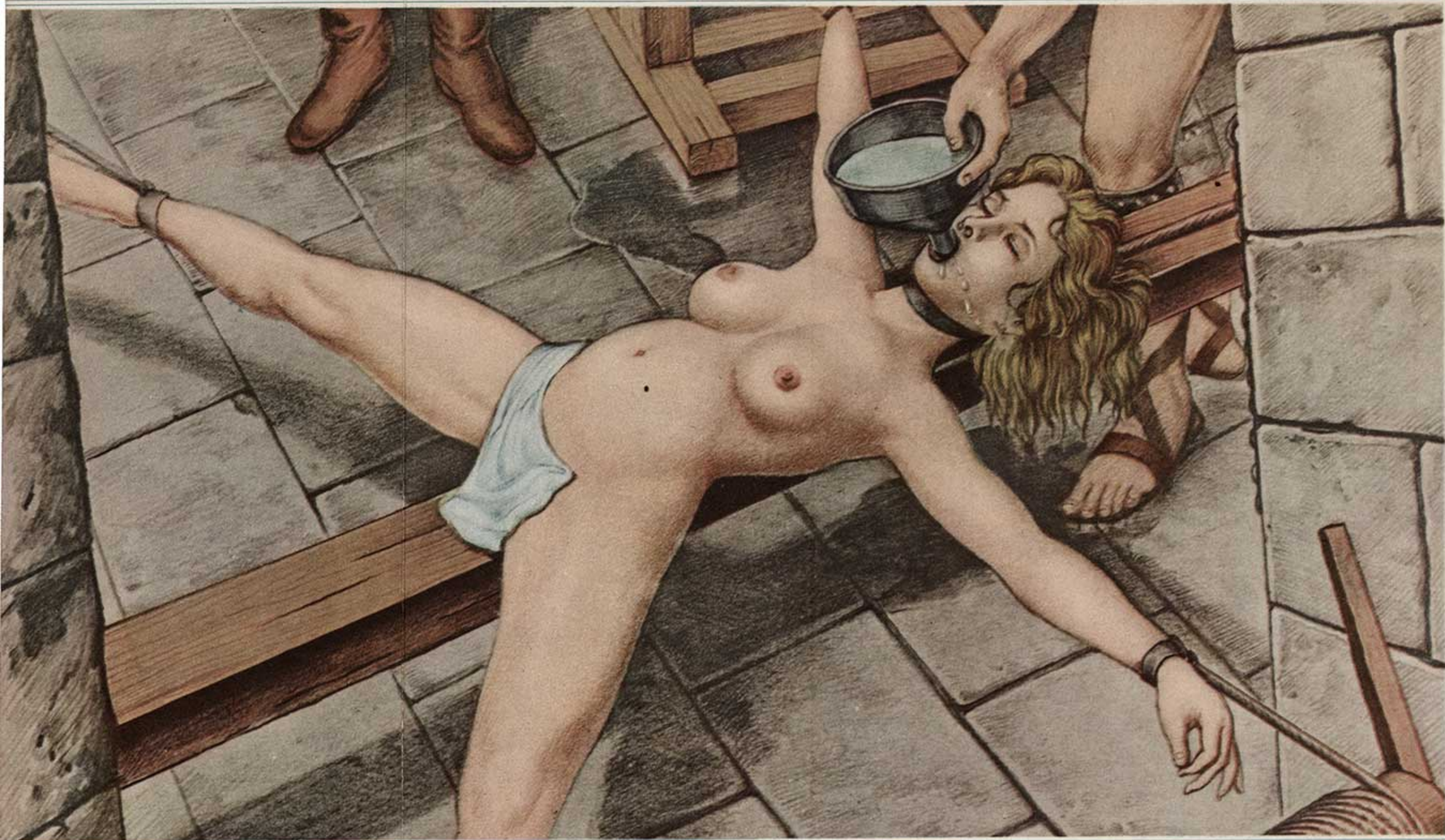
定価 140円



ムチ打たれる少年③



ムチ打たれる少年①



水 地 獄

土居啓子・え

ハダカにひんむかれ 手と足を大の字にひろげた姿勢で 杭に寝かされた女 その口を割
って ムリヤリ飲まされる水 鼻をふさがれば いやでも飲みこんでしまう水は たち
まち胃に充満し みるみる腹がせり出す これは 苦痛の極みであり 地獄の責め苦だ！

(下)革命結婚——フランス革命のとき、ジャコビン一派の極左テロが、反動一派の男女を素っ裸にして荒縄でくくり、川の中にほうりこんで溺死させた。当時の人は、これを「革命結婚」(マリアージュ・レヴォリュシオネール)とよんで恐怖した。この処刑は、ナント付近で盛んに行なわれた。(筆者は不詳)





ムチ打たれる少年 ②



風俗奇譚 十一月号 目次

グラビア

艶麗無残	……	(一)
はなやかな足吊り	……	(二)
恋繩の姿態	……	(四)
大の首輪のブラジャー	……	(六)
棒し	……	(八)
立像無残	……	(一〇)
紅白縄し	……	(一二)
陶酔のとき	……	(一四)
恥ずかしいポーズ	……	(一六)
吊るし責め	……	(一八)
まといつくへび	……	(二〇)

(多色刷口絵) 水地獄……土居啓子(折込)

特集 戦争残虐の記録

從軍看護婦の悲劇	拷問倉庫	……	島木恵子(五二)
終戦秘話	兵狩り	……	蘆立鋭吉(六八)
伊予富士の地獄地帯	……	……	鹿火屋一彦(九八)
人食人種を食った兵士	……	……	田島末雄(九二)
写真・戦争残虐の記録	……	……	(四四)

女性哀話	12人の集団ハリツケ	……	志乃田藤美(五〇)
火責め水責めにされた姉妹	……	……	岩崎弘一(五七)
毛焼きと髪切り	……	……	番場多計夫(六七)
ビルケナウのたそがれ	……	……	森下高茂(八〇)

女性 丸太小屋の惨・岩場ハリツケ	……	田上恵子(四〇)
責め絵 竹しばり責め・射撃のマト	……	小田利美(四二)
男をいじめる女・写真集	……	(三五)

秘帖① 少年愛の人びと	……	かびや・かずひこ(四一)
-------------	----	--------------

マゾヒストの手紙から⑤	……	谷貫太(二二)
あたしの乗馬日記	……	牧田則子(二四)
あたし女の下着に憑かれて	……	真崎伸一(二六)

秘境の怪談 冷房用女体ベッド	……	中林勇(二四七)
香港魔術街 死美人館潜入記	……	神田弘晴(二四〇)
☆読者サロン	……	(二七)

アブ小説 ひつぷ・えんど・はいひーる	……	獅々村祐(二五八)
--------------------	----	-----------



ムチ打たれる少年 ③

少年の肌は やわらかい

お尻も 白くて 丸い

そこにムチを当てられると

すぐ 赤いスジが走る

それが 年配の女を燃えたたせる

興奮の嵐を巻き起こす

だから ムチは

ある種の女にとって

宝石よりも大切なのだ

艶麗無残

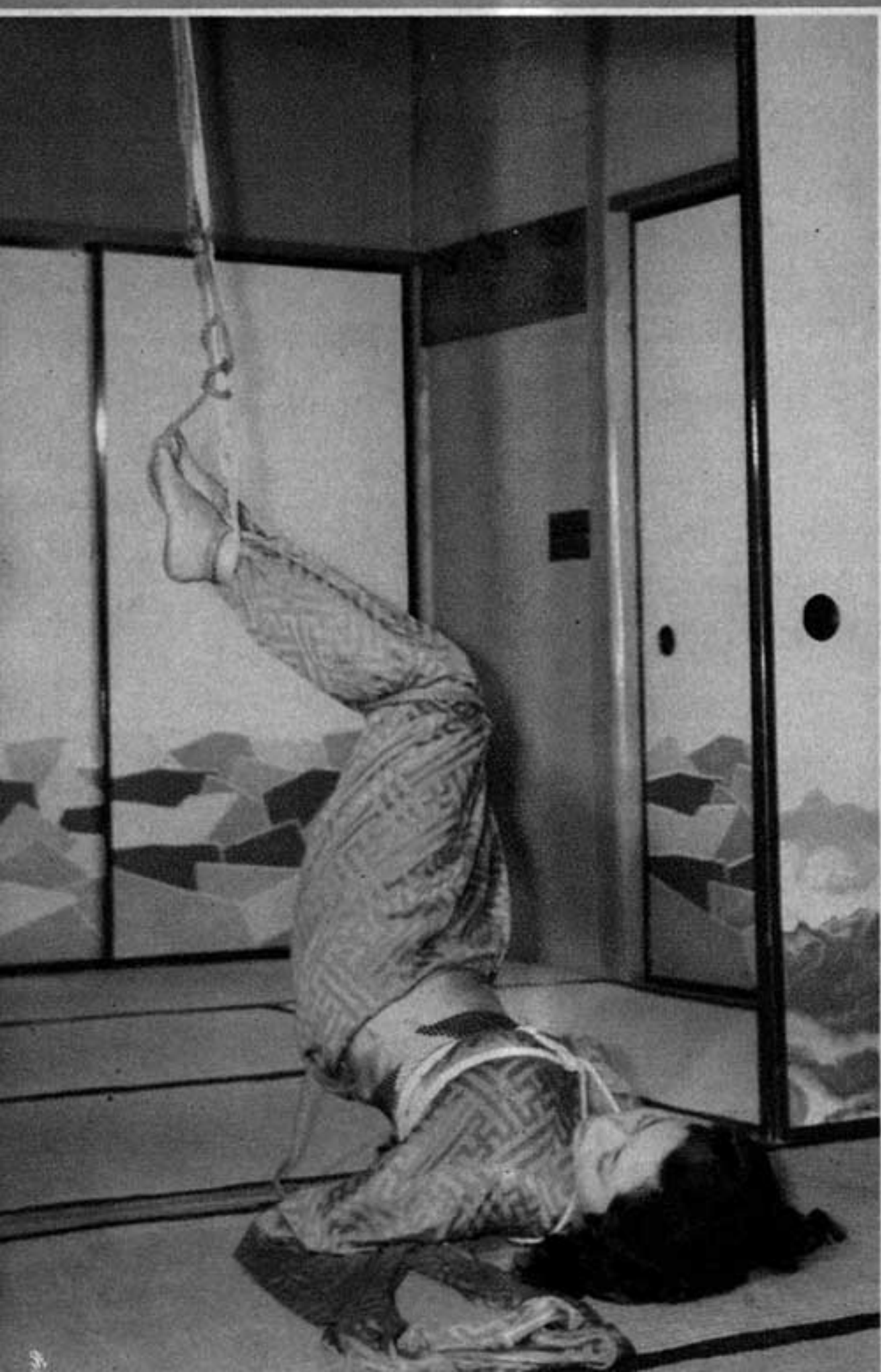
はなやかな長じゅばんが タタミの上に パツ
と 花のように散り 手と足をくくられた女は
無残にも 色とりも鮮やかに しばられている





はなやかな足づり

足首を グツと しかも思いきり つり上げ
られると ぶら下げられたマグロのような格
好だ ハデな長じゅばんの裾が乱れて パツ
と花ひらく白い肌 その白と じゅばんの赤
が照り映えて この無残絵図の なんという
なまめかしさ 空中を切る白い足が 魚の白
身のようにピラピラして ああ艶麗の一コマ



恋縄の姿態



大きな石の前にうずくまって あたしは縛られたい と思った 望みが
かなって縄を受けたとき その感激が 電流のように からだを貫いた
そのとき あたしは 女の生きるよろこびを 噛みしめることができた



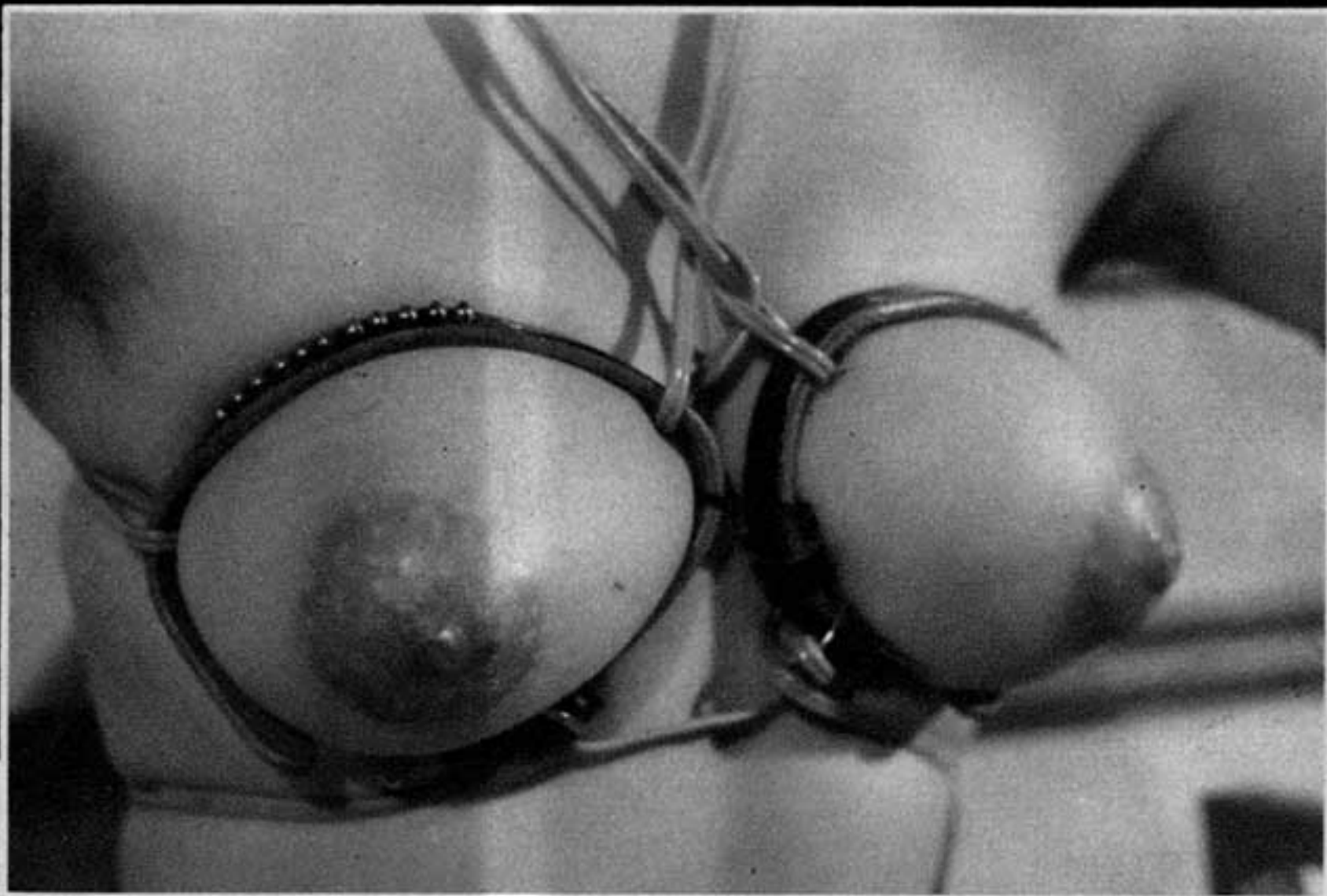


犬の首輪の ブラジャー

この皮製のバンドは 犬の
首にかけるだけではない
二つの乳房をしめつけ 人
間の首まで 巻いてしまう
首と乳房をしめつけられる



と女は呼吸をあえがせ 苦
痛を耐える その苦痛の中
から 湧然とわきいでるの
は 一種不可思議な陶醉で
これは魔薬の毒をもつ







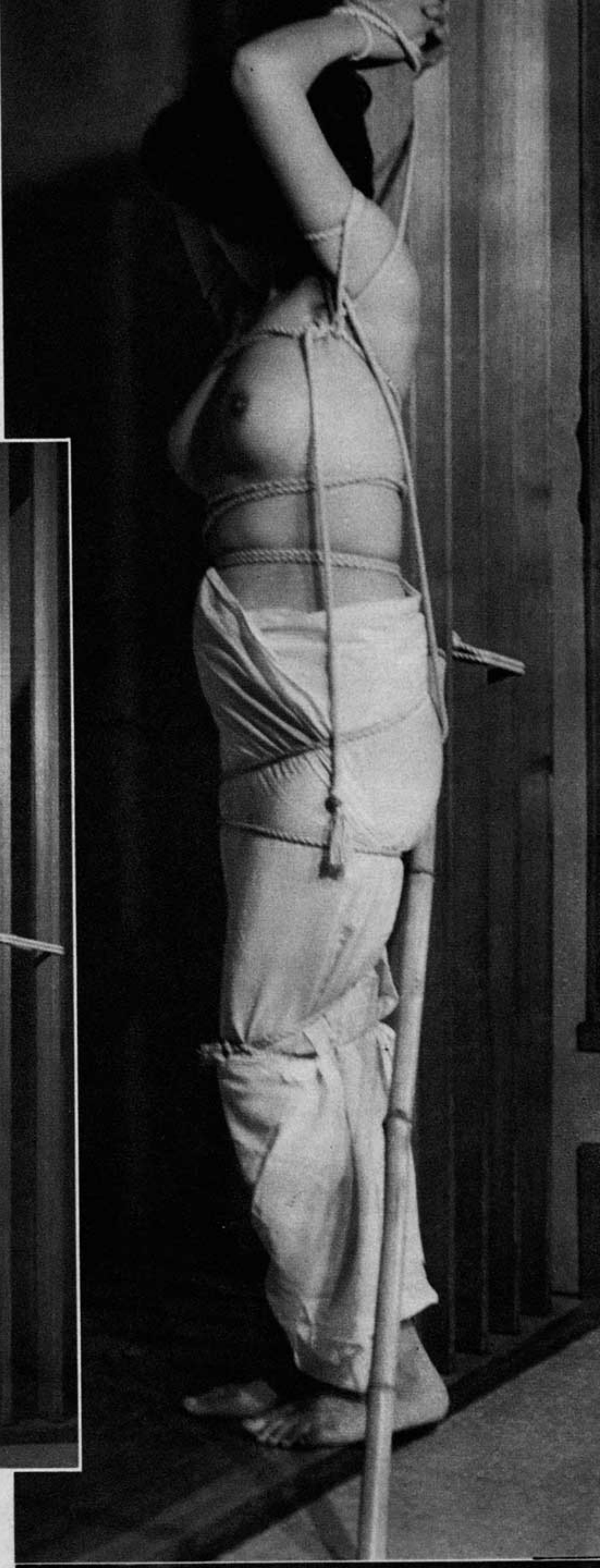
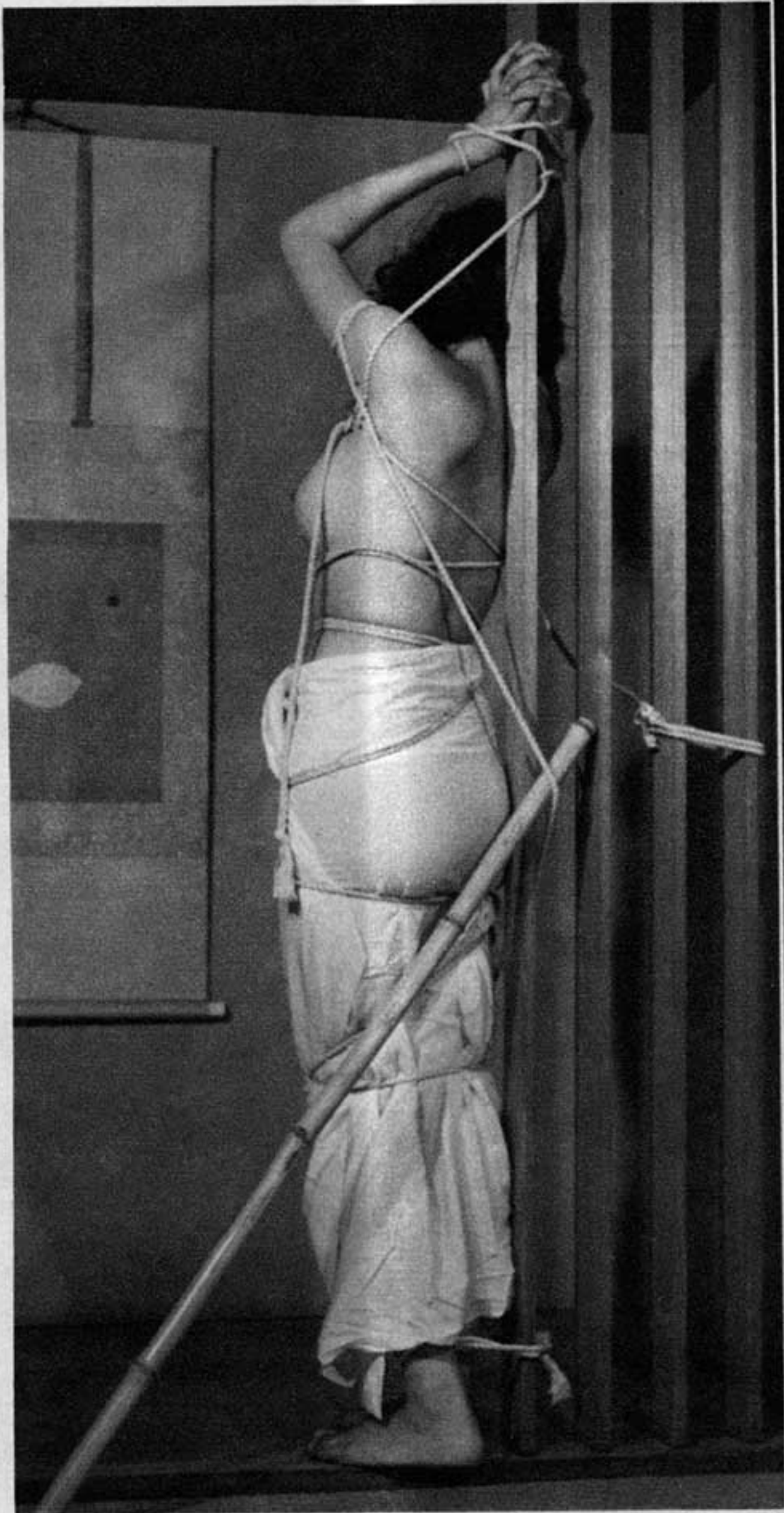
棒しばり

竹ザオで足を開かれて 手はうしろで縛られて この
処置なしの姿勢で ハダカにむかれた女のあるポーズ

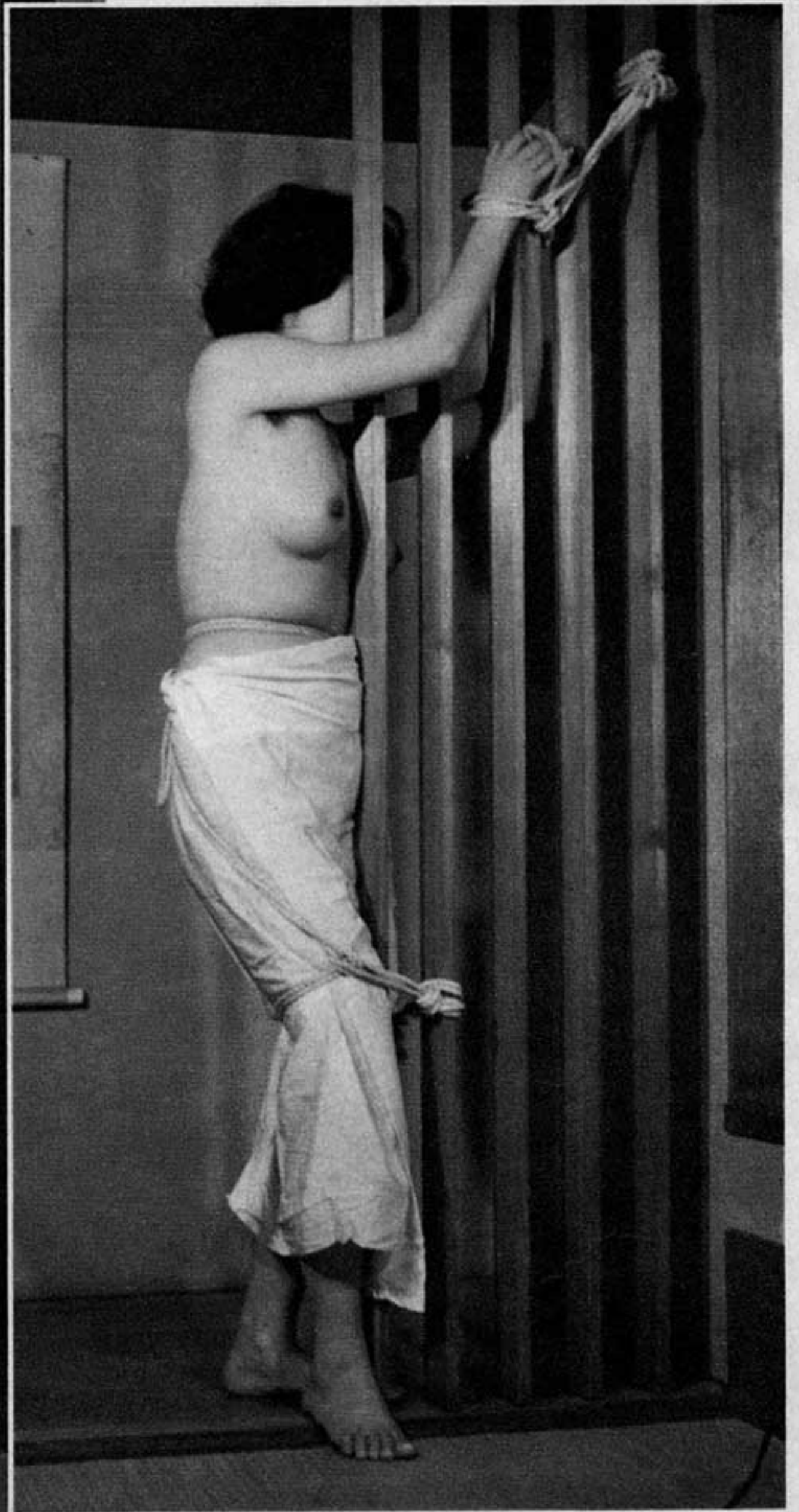


立像無残

手は頭の上でくぐられ か
らだじゆうをぐるぐる巻き
にされた女は 絵に描いた
無残草紙そのままだ 乳房



をぐいと押しつけられく
びれるほど胴中をしめられ
た女は一枚の無残絵さな
がらだ 立ったまま責めら
れる 地獄のような苦痛に
女は 悲鳴をあげ 身もだ
える 乳房があえぎ お腹
が波をうち ああ この荒
荒しい残虐のひとつときに
女は 女の業を知り その
生理を噛みしめ味わうのだ



紅白縄 しばり

紅白の縄が 白い肌
食いこみ 乳房を責め
あげ 腕をうしろにひ



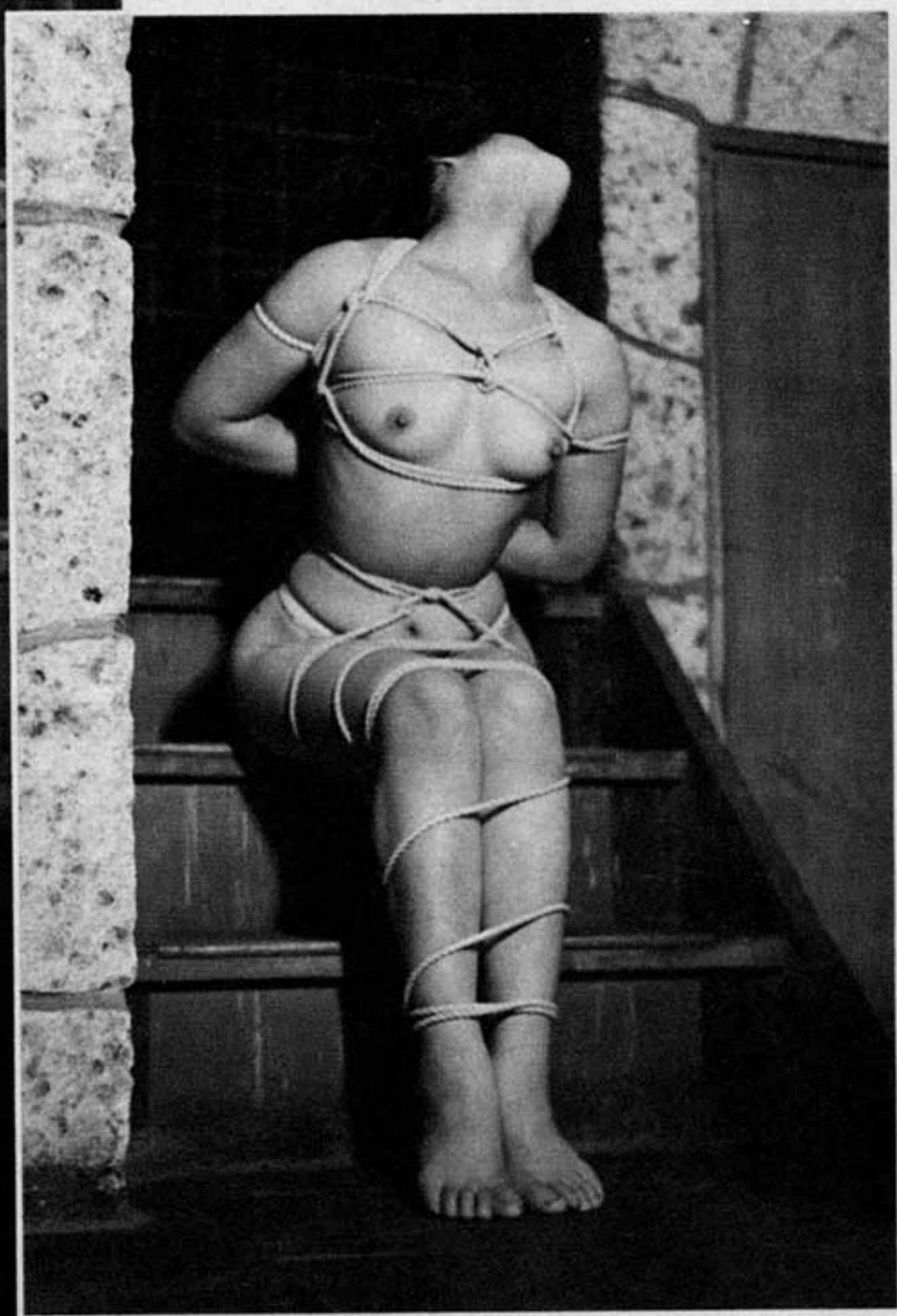
きあける 格子の前の
このポーズで 浴衣も
乱れて なまめかしい





陶醉のとき

首から 胸から お腹から そして足の先まで結
えられると ちよつとしたミイラの感じだ その
姿勢で階段に置かれると 奇妙な感覚が からだ
のシンを通して走り なにか得体の知れないクス
リを飲まされたように 全身がしびれる えも言
われず甘い雰囲気 が しわしわと湧き出してくる



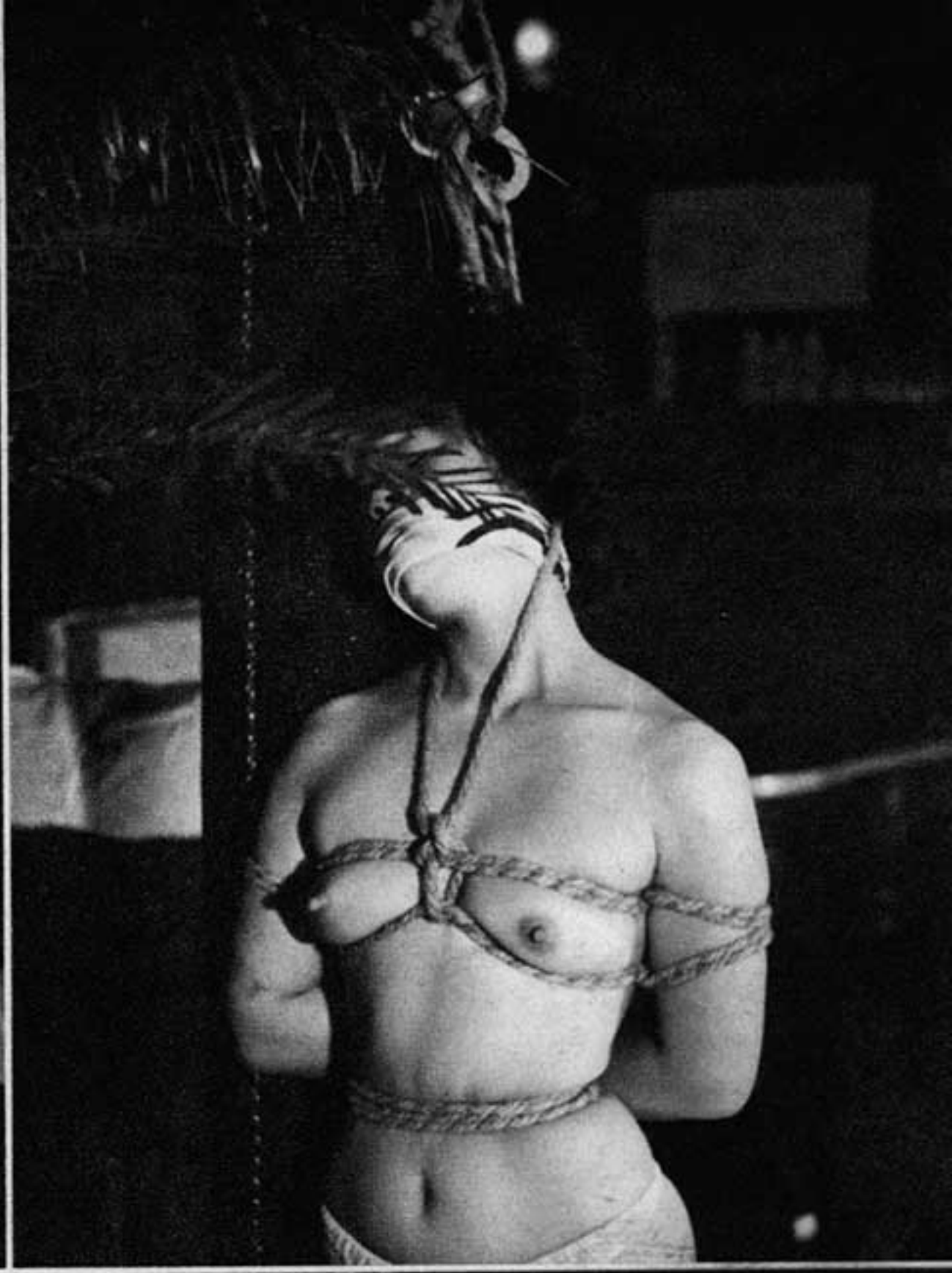


恥ずかしいポーズ

うしろ手にくぐられ 足首まで縛られたポーズで投げだされると 何をされても 抵抗できない どんな恥ずかしいことをされても 黙って甘受しなければならぬ そういった無抵抗の状態におかれたとき 女は たまらない羞恥を感じるものだ たとえ それが 愛の行為であったとしても どうしようもない思いに さいなまれる まして 痛めつけられ 責めつけられるとしたなら それこそこのうえない恥辱であり 屈服である だがそこにさえ 女の生きる道があり 女の心からよろこびを感じる境地があるとしたら……







吊るし責め

乳房をしばった縄が、そのまま首にまといつき、鉄の輪カギで吊りあげる。これは、人間起重機だ。もがいても、あばれても、この機械は、無表情に、しかも情け容赦なく、哀れな犠牲をしめあげる。



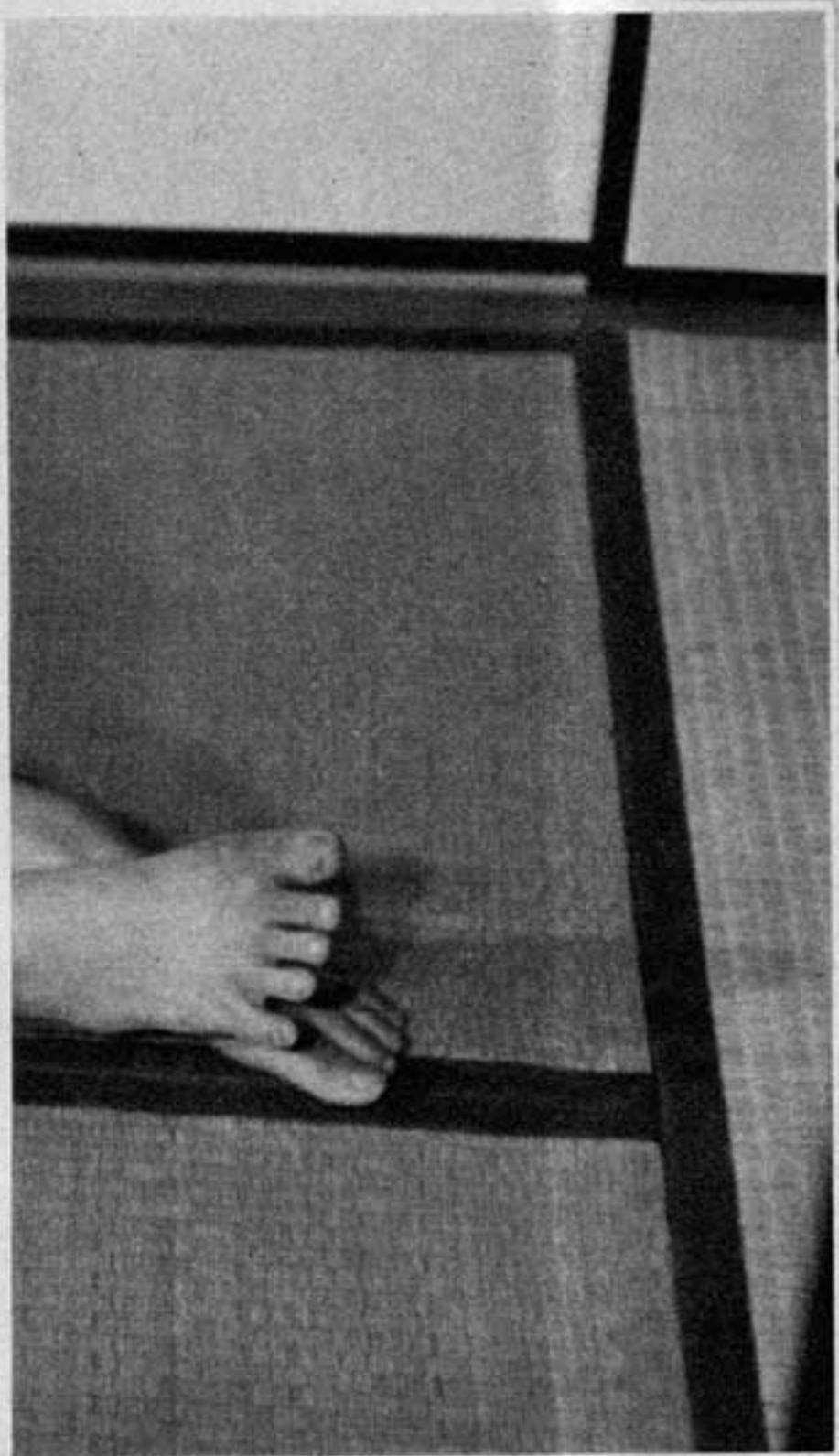
まろくくくくく

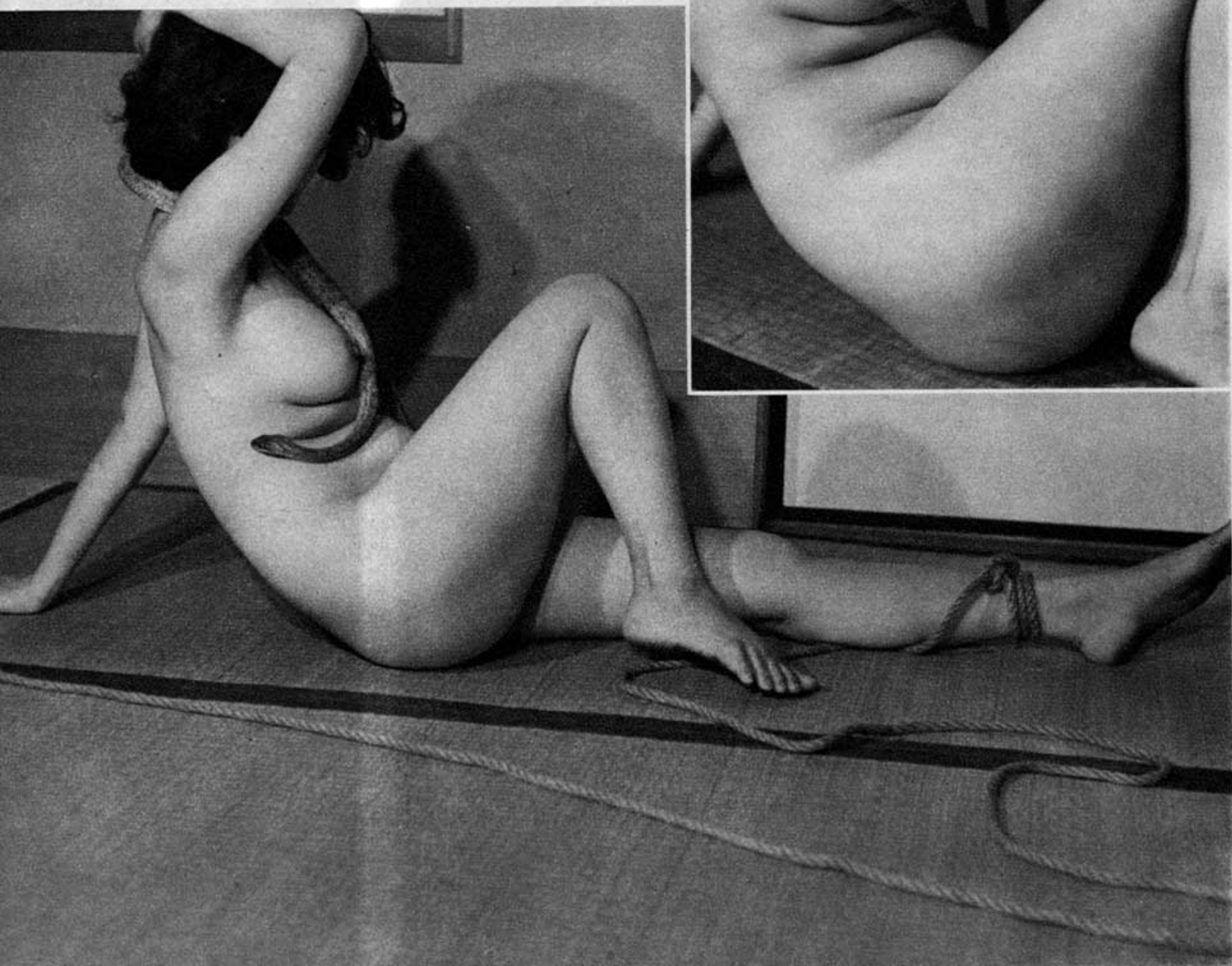


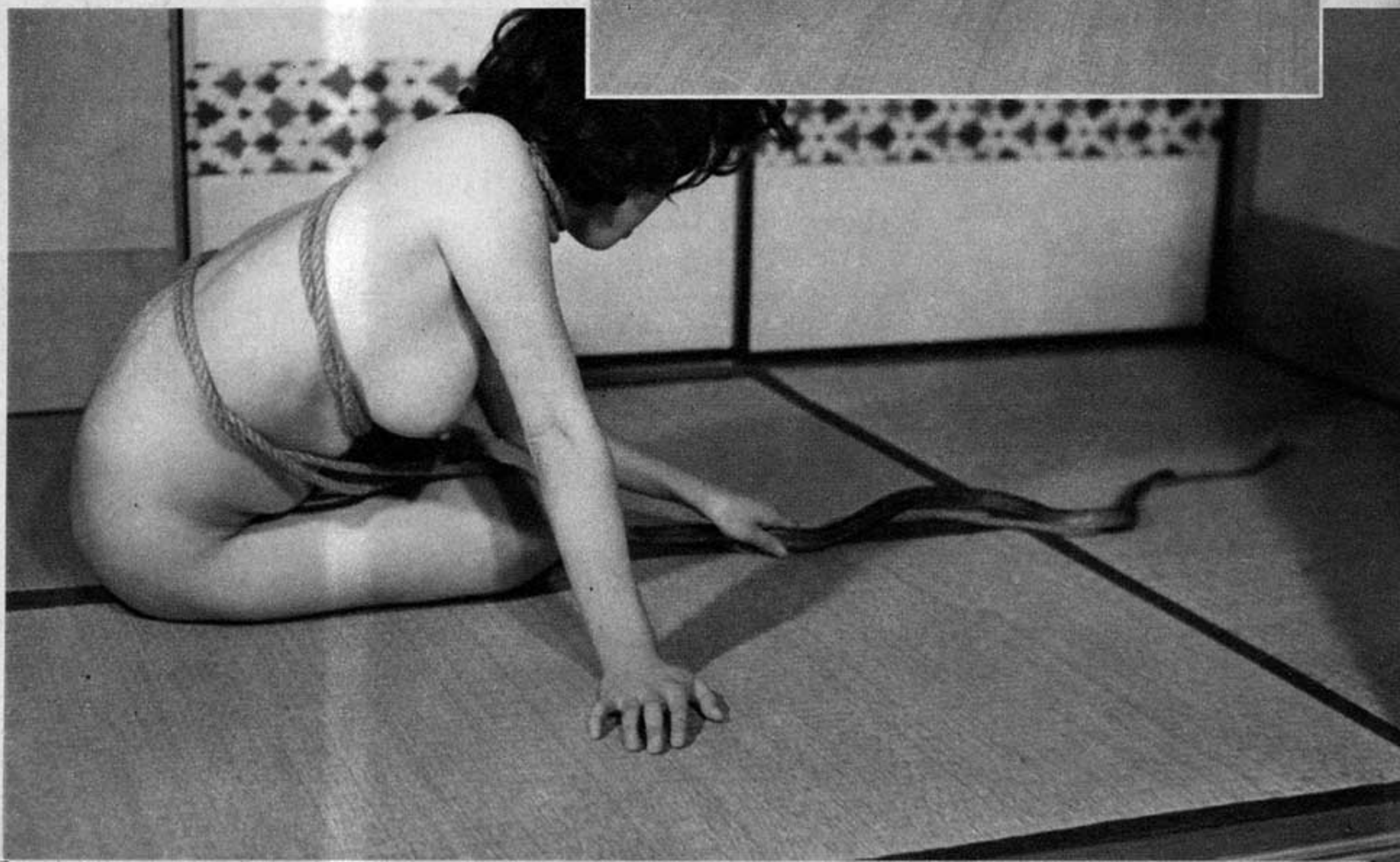
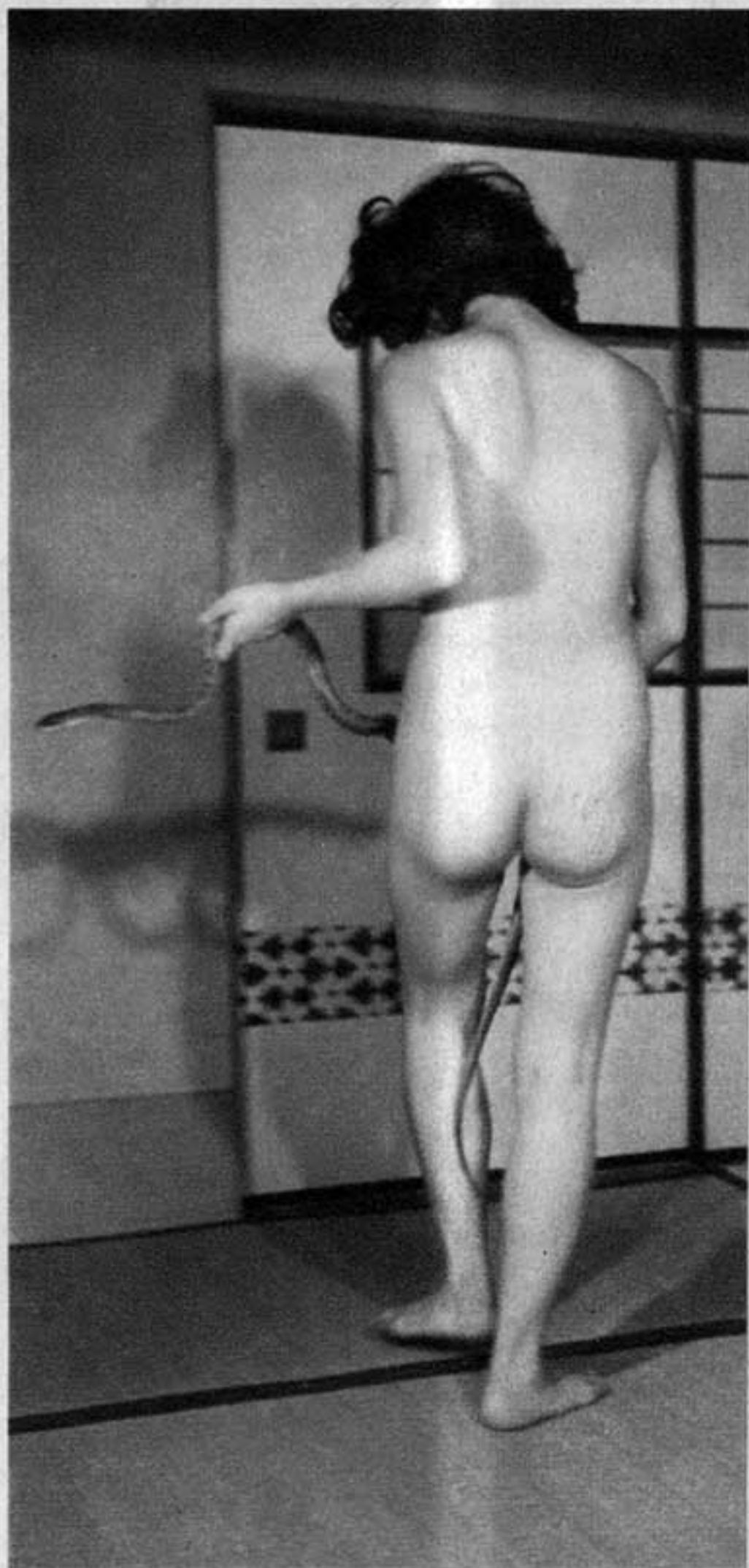


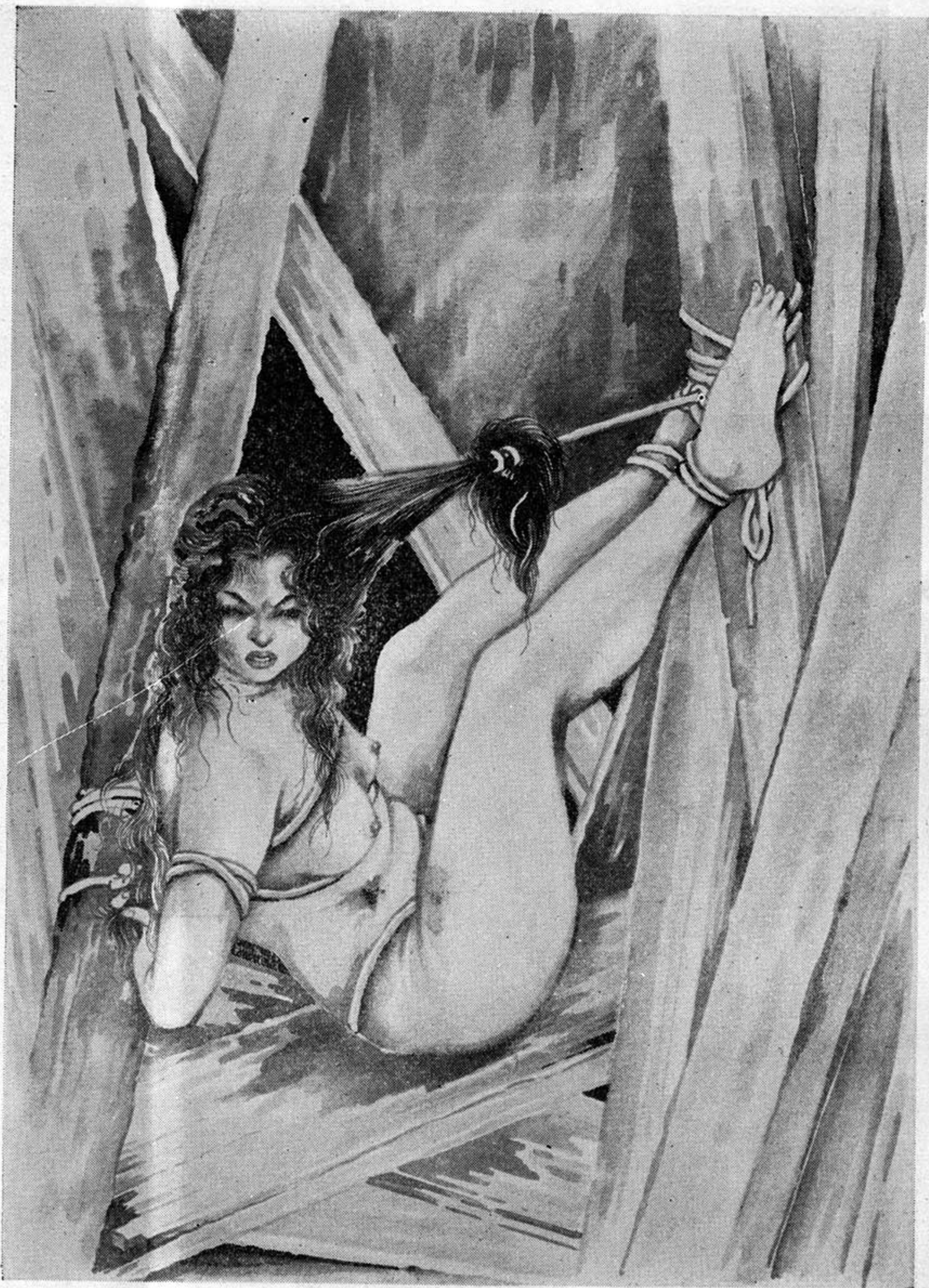
くちなわとはへびのことをいう 巻きつくからだろうか 女
は へびを からだに巻きつけ さらにさらとした冷たい感触
を楽しむ へびもまた すべすべした女の肌に巻きつくと気
持ちがいいのだろうか 鎌首をもちあげて 安らぎを求める











丸太小屋の惨

人気のない丸太置き場 そのあいだの小さな隙間に 手と足と髪の毛まで縛られ自由を奪われた女 残酷な時が流れる 田上恵子・え



岩場ハリツケ

冷たい岩に打ちつけたピトンに しっかり手足をはりつけられた女
は 標本箱の昆虫のように このまま息絶えるのか 田上恵子・え



竹しばり責め

女体をしばった竹は はね返ろうとたわんでいる 一本縄が切られれば 女はたちまちマタ裂きだ このスリルの一時 小田利美・え



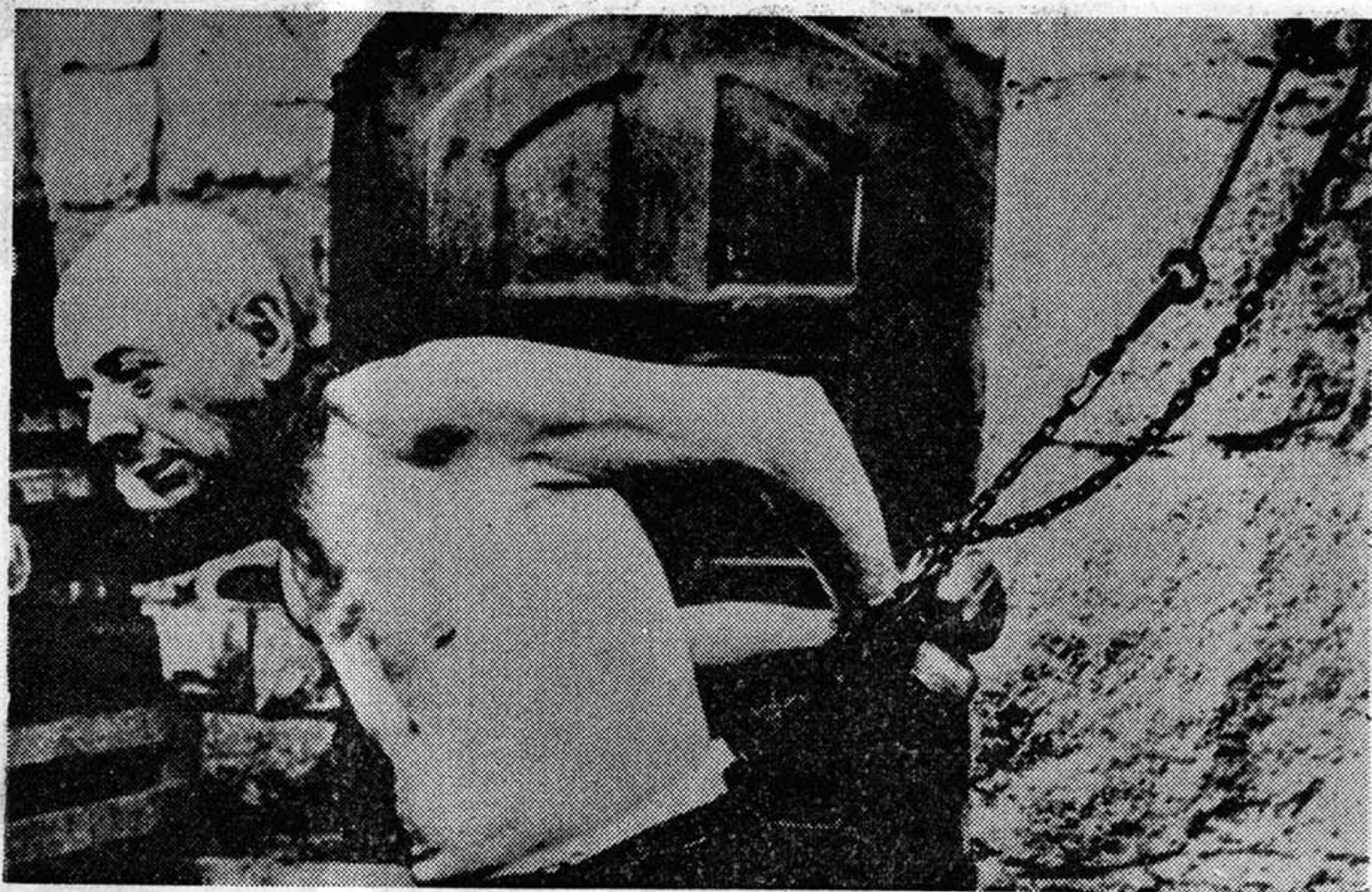
射撃のマト

それるだけ身をのけぞらせた白い肉体 乳房のあいだに置かれたま
っ赤なリンゴ これは 西部のウィリアム・テルだ 小田利美・え

写真
戦争残虐
の記録

侵入したドイツ軍に、老若男女の別なく
つるし首にされたポーランド人(1939年)

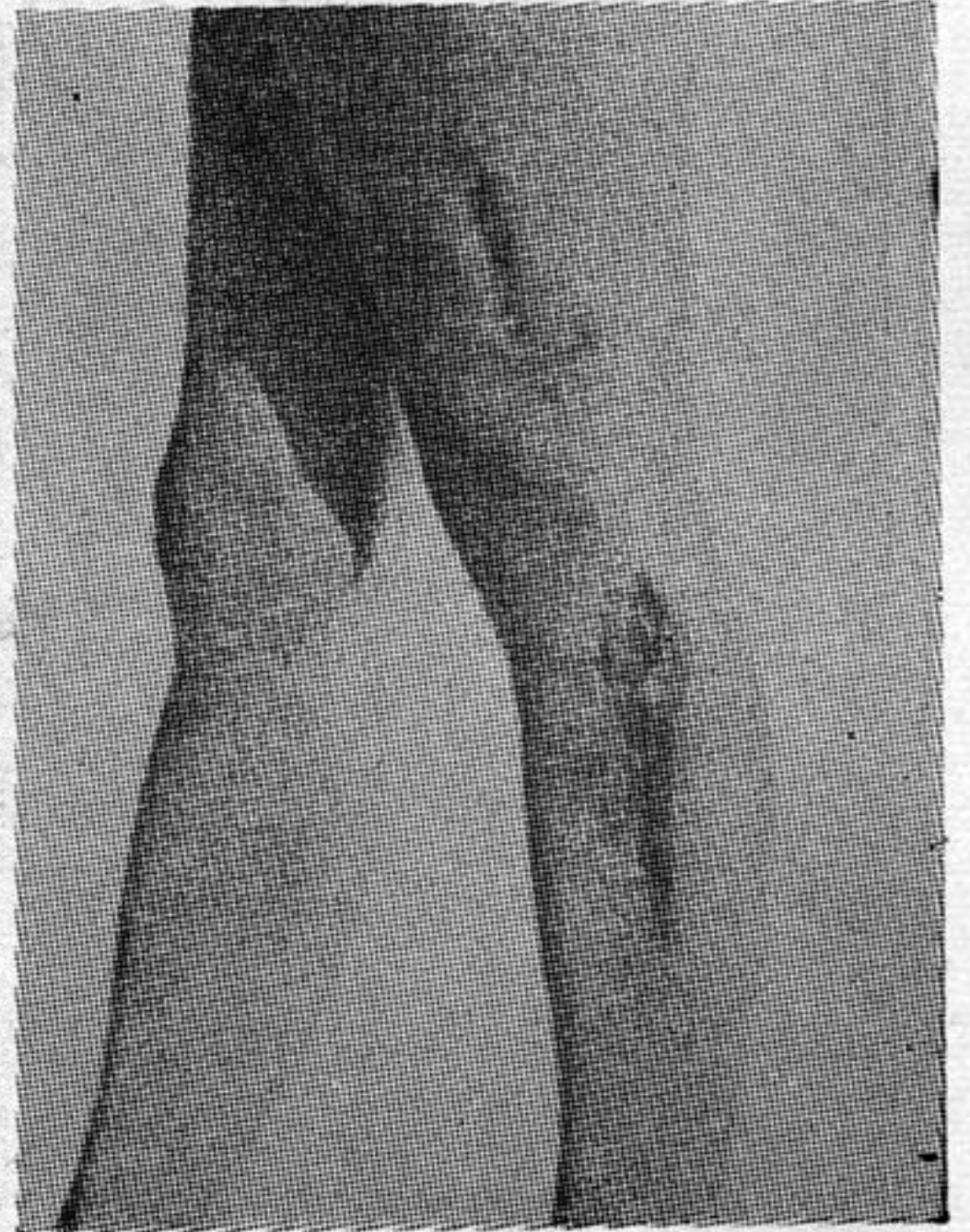
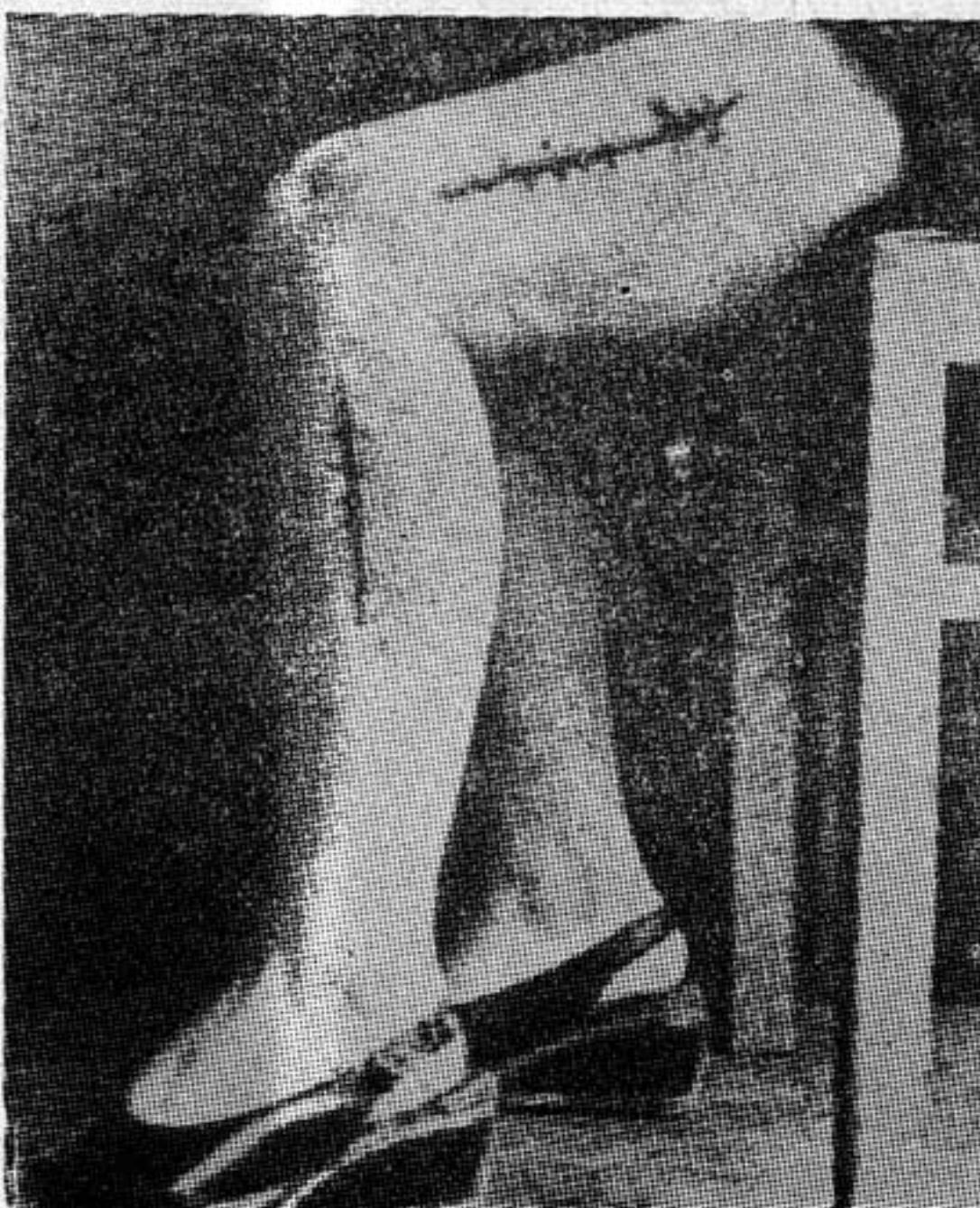




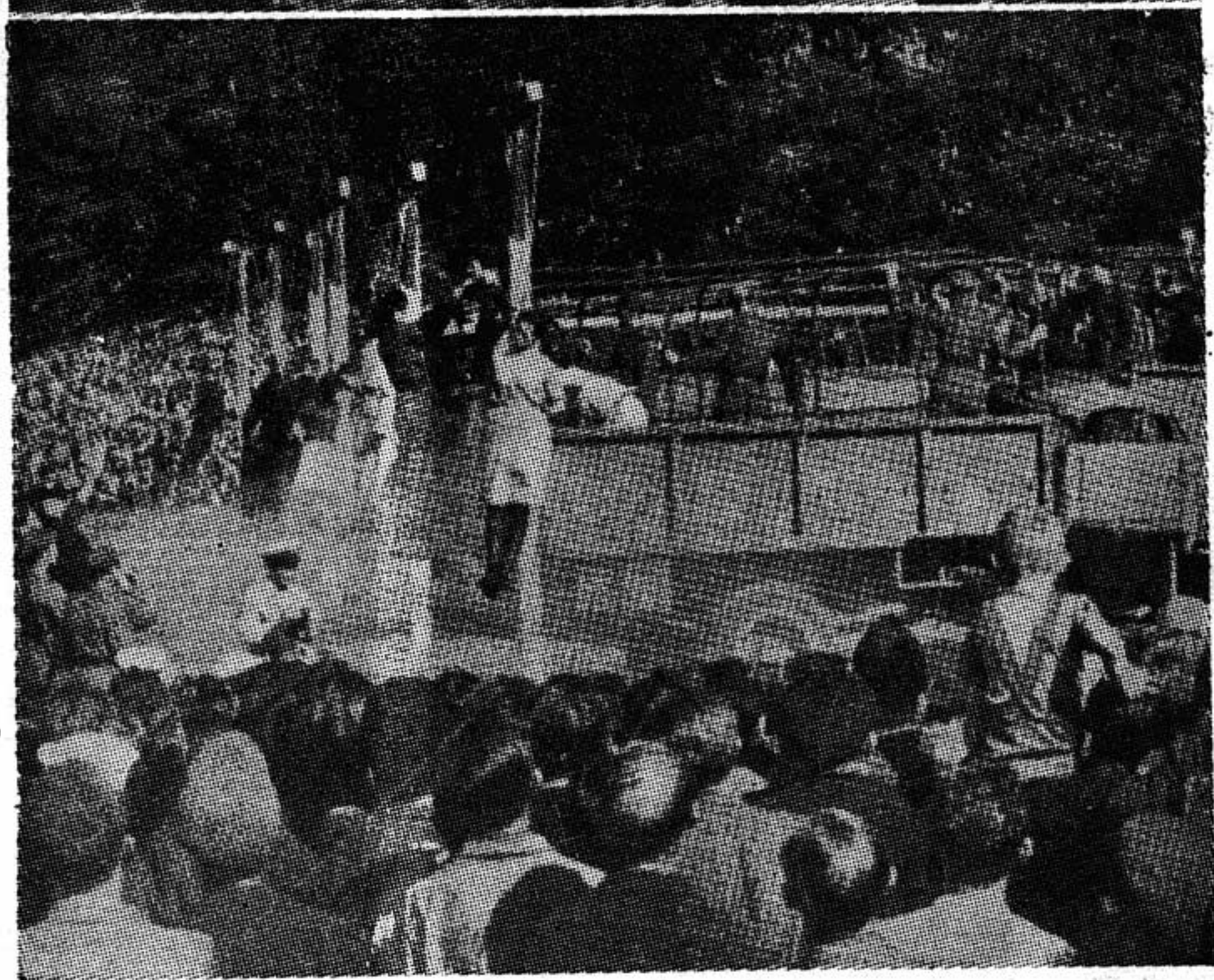
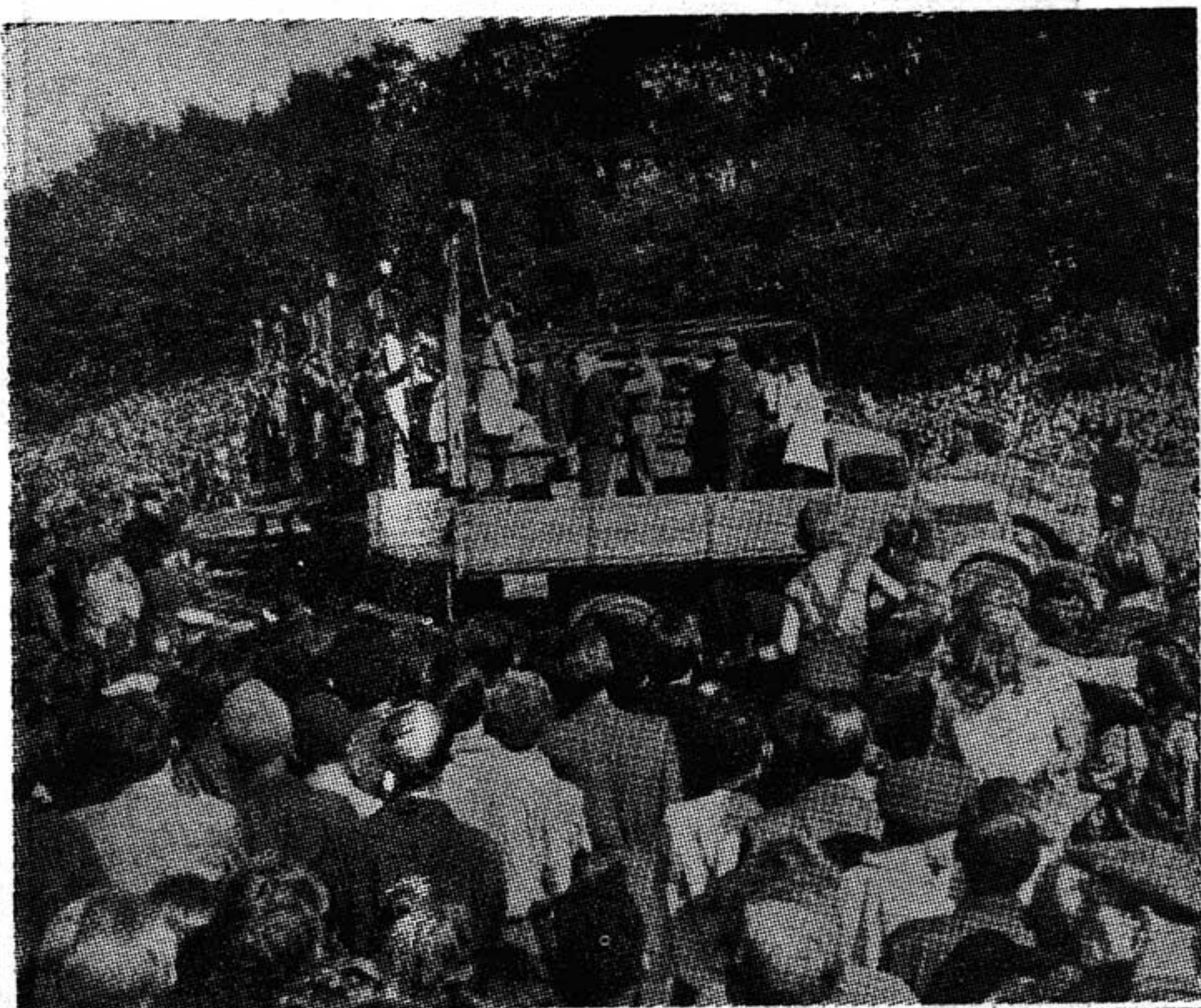
クサリで地下牢に監禁，拷問の末，残殺されるのだ

ポーランドの愛国者たちは，ドイツ軍によって銃殺された(1940年6月)





(上) 逃亡したが射殺された囚人
(右) 女性に加えられた生体実験

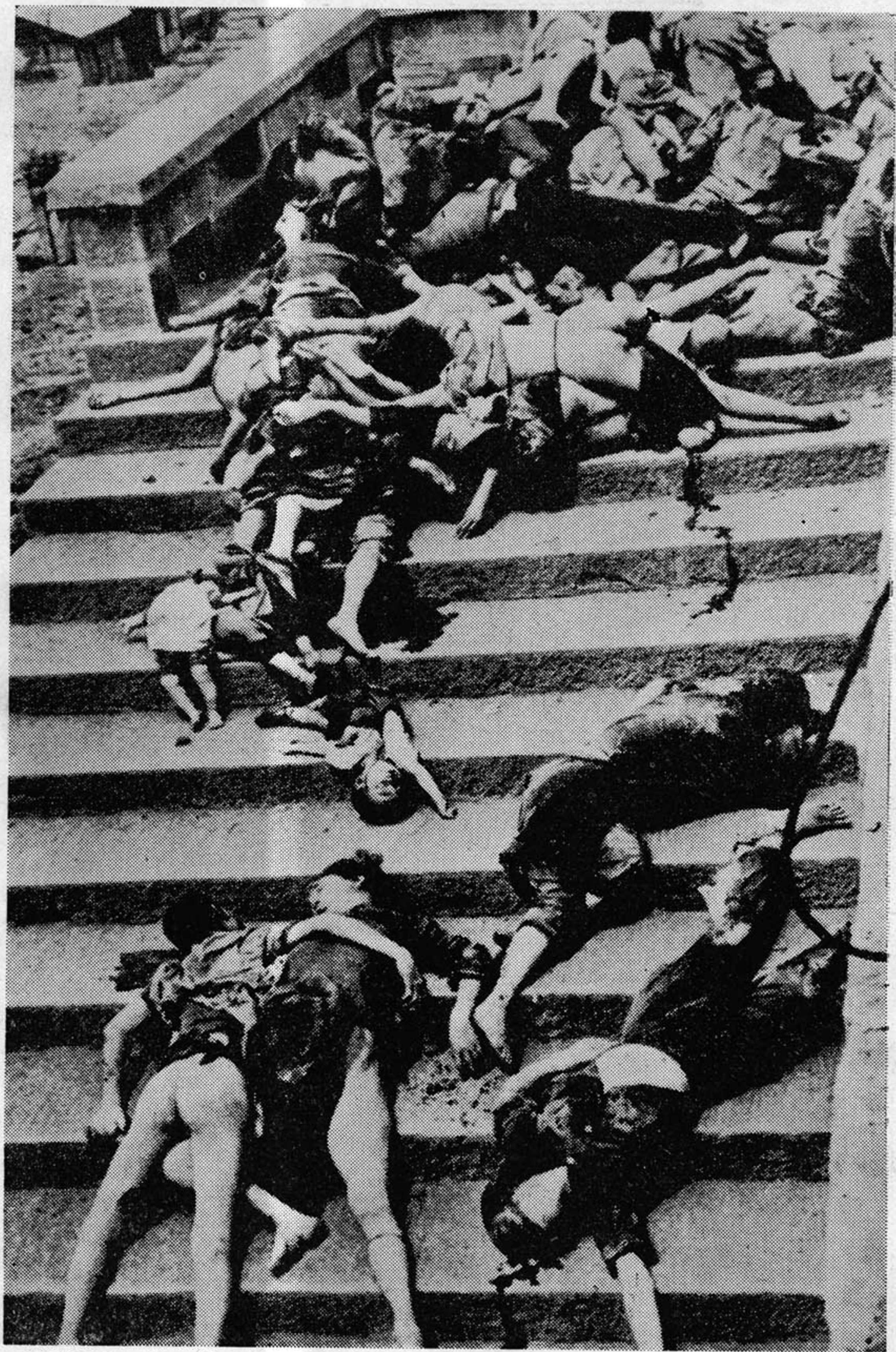


ポーランドにおけるユダヤ人200万人を殺害した犯人に対する死刑。11人の共犯者のうち4人の女性が含まれていた(ダンチツヒ)

一九三九年冬のナチス軍による銃殺



捕虜を目かくしして杭にしばりつけ、銃剣で突き刺す



猛爆撃に殺された老若男女の中国市民の死体



ナチスは、パルチザノをロープで自動車のうしろにつなぎ、さんざん引きずったあげく、処刑した

譚奇俗風

凌辱無殘集特・11月号

最大のサディズム

大達 欣治

最大のサディズムは戦争である、といった人がいる。確かに、戦争ほど、残虐非道、酷烈無残なものはない。数百、数千、いや数万の人間をも、一瞬のうちに、地球上から抹殺してしまうのだから、どんな殺人鬼も及ばない規模の大きさだ。

もともと人間の心の底には、残忍な獣性がひそんでいるという。それが、集団行動によって、しかも「食うか食われるか」「殺すか殺されるか」のギリギリの局面に立たされるのだから、獣性がむき出しになるのは、当然の成り行きといえよう。

人間というものは、集団のなかでは、同化されるものだ。つまり、集団のなかでは、どんな破廉恥なことも、どんな野蛮なことも、平気で、良心の呵責なしにできるものだ。そこに、人間の弱さがあり、付和雷同性があるとみてよからう。競輪場における八百長騒ぎから、建物の破壊、放火に及ぶのもそうだし、デモ行進が一瞬にして暴力行為に突入するのも、そのあらわれである。

さて、戦争における残忍な行為のかずかずをつきつめていくと、どうしてもサディズムに到達する。となると、人間の心理の底にはサディズムの芽が横たわっているとみて差し支えあるまい。

それが、いろいろな形になってあらわれるところに、ふつういわれる異常性欲が見られるのだ。あるいは強く、あるいは弱く、または裏返しになって、そしてまた変形して、種々さまざまな形態となって発現するのである。

ただ戦争の場合、サディズムの面だけが、極度に結集されて見られるのだろう。

抑留看護婦の体験

美しい裸身に、鬼伍長のムチは容赦なく打ちおろされた。乳房に、下腹に、腿に、赤いムチ痕が縦横に……

拷問倉庫

島 木 恵 子

田 上 恵 子・え

1

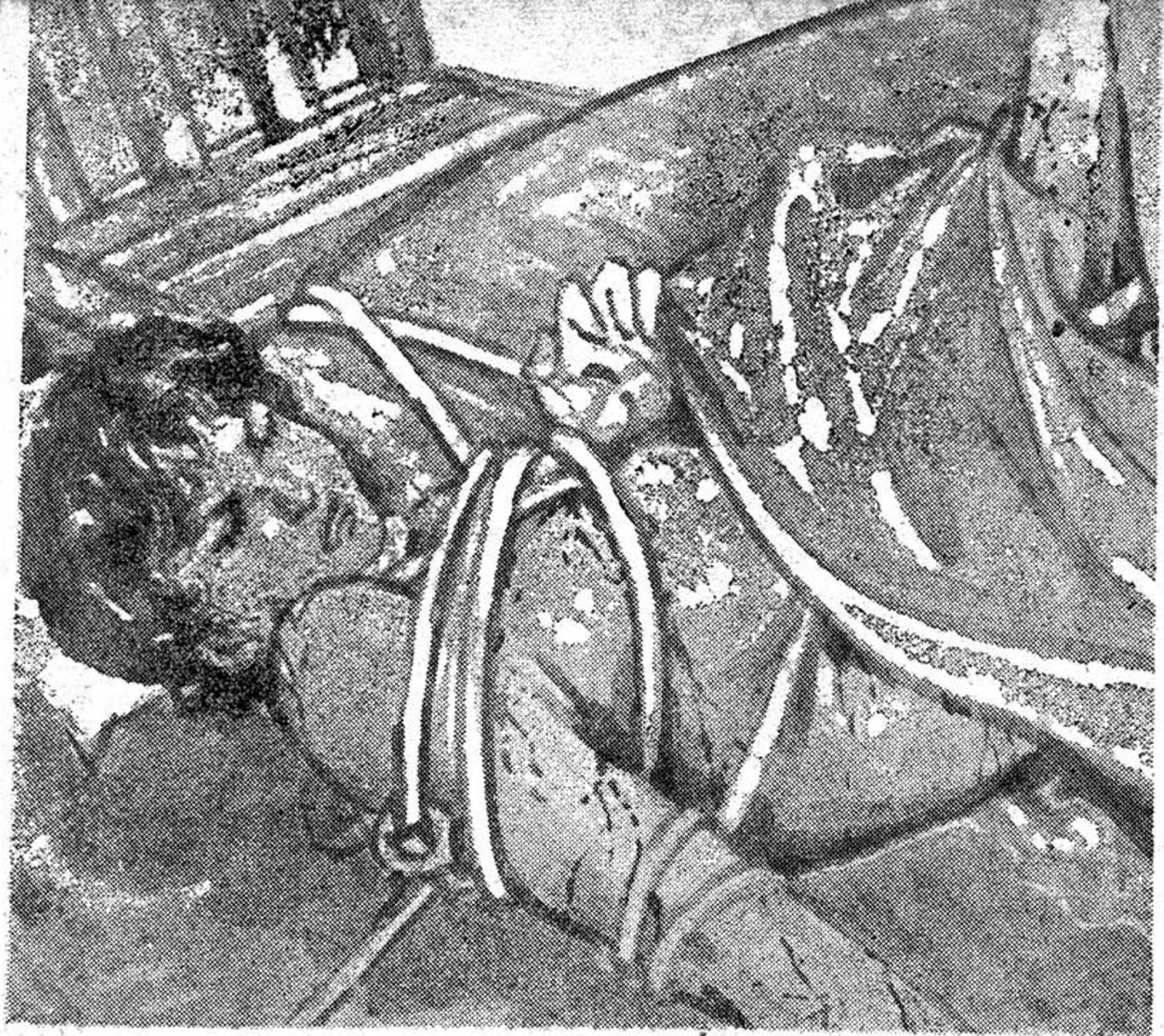
呪わしいあの日。忘れようとしても、とうてい忘れることのできないあの日、一九四五年十一月二十日。

その日がまたやってきます。そして私は、戦争への憎しみをあらたにするのです。私の内腿にのこる忌々しい傷痕とともに、私の心に刻みこまれた、はげしい汚辱の記憶。

ソ連軍が、北満国境の三地点から、怒濤のような勢いで侵入を開始したのは、十五年前の八月九日でした。

それから三カ月後、私たちの運命、いや日本の運命は、激





しく変わったのです。

当時、私たちは梅河口北方十五キロほどの柳屯りゅうとんという小さな村落にある、陸軍病院に勤務していました。病院といっても、村の集会所を改造した建物で、いわば分院といった形のものでした。

それでも、重症患者約二十名、軽症患者は四十名ほどが収容され、軍医、衛生兵合わせて七名と、私たち看護婦八名が所属していました。

日本の敗戦と同時に、当然のことながら、私たちの病院も、ソ連軍の管理下におかれたのです。そのうえに、やがて捕虜収容所も兼ねるようになり、軍装を解かれた日本の兵隊たちが、ぞくぞくと送りこまれてきました。

みじめな敗軍の将兵たち。そのひげだらけの顔には、不安と疲労と絶望が濃い陰影をおとしていました。

不安や恐怖は、兵隊でもない私たちとて、同じことでした。すでに新京や奉天など各地における暴徒たちの略奪や暴行のおそろしい噂は、この田舎の村まで伝わってきていました。

しかし、私たちの病院に駐屯したソ連軍の兵隊たちは、比較的軍規に忠実だったように思います。一つには、患者、医者、看護婦などという非戦闘員ばかりでしたので、彼らも手加減をしたのでしょう。

脅おびえながらも、生命の無事だけは保障されそうだったの

で、私たちはホッとひと息つきました。

病院の周囲にはぐるりと太い杭が建ち並び、杭と杭の間に、トゲのある鉄条網が張りめぐらされました。脱走を防ぐためです。

日本軍の捕虜たちは、疲労が回復してくると、ソ連の監視兵の目を盗んでは脱走をはかりました。日本の捕虜は、全員シベリアへ送られるという噂がひろがっていました。

雪と氷のシベリアには、地獄のような重労働が待っていて、連れていかれたら二度と生きては帰れないという、恐怖のための脱走でした。

十月のある夜、脱走をはかった一人の捕虜が、監視兵の拳銃を奪い、追跡したソ連兵を二名射殺するという事件がおきました。その捕虜は逃亡したようです。

ソ連軍の態度が硬化し、監視がきゅうにきびしくなったのは、それからでした。

「今後この収容所から脱走を計った者は即時射殺する」という布告がだされました。

食事も次第に悪くなり、一人当たり一日三合の高梁米こうるやんまい、それも大豆が半分以上も混入されたものになりました。

私たち看護婦は、そうした不安や束縛と戦いながらも、一生けんめいに患者の世話に毎日を送りました。たとえ戦争に負けて、いまは抑留の身であっても、それが私たちの天職だったからです。食料も不足、医薬品も不足という乏しいだら

けの生活のなかで、私たちは『国際法』や『万国赤十字協定』のことを思いだすのでした。それらの協定が守られる以上、私たちには希望があるのです。

「みなさん、がんばりましょう。私たちは、かならず日本へ帰れます。故国の土を踏むまで、勇気をだして、この苦しい毎日を耐え忍びましょう」

三原婦長さんは、そういつて、私たち若い看護婦を励ましてくださるのでした。まだ年齢も三十前で、若く美しく、しっかりした気性の婦長さんでした。

2

あの忌わしい事件の発端はつたんは、十一月十九日の夜、起こりました。

その夜、志村という若い衛生兵が脱走をくわだてたのです。それは成功しました。

志村衛生兵は、八人の看護婦が眠る宿舍裏の鉄条網を破って逃げたのです。そこは監視兵の目が、比較的にゆるい場所でした。

なぜかという、私たち女性には絶対に逃亡しないという信用があったからです。脱走しても、冬の迫った満州平野を、女の体力で逃げきれないことはわかっていました。ソ連軍のジープに、たちまち追いつかれて射ち殺されます。それに私

たちは、患者を捨てて逃げることもなんかできません。

そういうわけで、ソ連兵の油断がある看護婦宿舎裏の鉄条網を狙って破ったのは、だから志村衛生兵としては、考えた脱出口だったのです。

しかし、そのために、とんでもない災難が、私たちの頭上にふりかかったのです。

二十日の早朝、太刀川軍医が血走った形相で、私たちの寝床へ現われました。

「おい、みんな起きろ。昨夜、脱走した奴がいるんだ。お前ら、知ってるはずだ。この宿舎のすぐ窓の下から逃げたんだぞ！」

太刀川軍医は、いきなり乱暴な言葉でどなりました。その声の大きさに私たちは目をさまし、それからふるえあがりました。

この病院兼収容所に三人いる軍医の中で、私たち看護婦が一番けいべつし、怖れ、そして憎んでいたのが、太刀川軍医でした。

年齢は当時まだ二十八歳ぐらいだったと思います。その病院では最年少の軍医でした。

私たちが太刀川軍医をけいべつしていたのは、彼が、ソ連軍に必要以上のおべっかやら、おついしょうをいって、自分だけがいい目にあっているからです。

彼は、かたことのソ連語が話せるのをいいことに、自分か

ら通訳を申しでました。

腕時計を自分からすすんでソ連の将校に捧げたのも、太刀川軍医でした。

そして彼は、通訳という地位を利用して、自分だけが文字どおり、うまい汁を吸っていたのです。温厚な院長をおしにかけて、病院の実権まで握ろうとしていました。

私たちが彼をけいべつし、憎むのも当然だったのです。

「おれにはわかってるんだ。お前たちが共謀して志村衛生兵を逃がしたんだ。そうだろう？」

太刀川軍医は、自分で興奮をしずめ、ひややかにいいました。

「知りません。私たちは、昼間の勤務の疲れで、夜はぐっすり眠りました。ですから、昨夜、そんな脱走があったことには、全然気がつきませんでした」

三原婦長さんは、はっきりといました。

「嘘をつけ。その窓の下をのぞいてみる。あんなに頑丈な有刺線が、すっぽり抜かれている。一晩だけで出来る仕事じゃない。計画して何日もかかってやった逃亡だ。お前たちが手伝ったんだ！」

太刀川軍医は、また、どなりはじめました。

まるで、自分がソ連軍の将校であるかのような口ぶりでした。私は、虎の威を借る狐ということわざを思い出しました。「私たちは存じません。そんないいかげんな想像はしないで

ください」

私はくやしくなって、婦長さんの横から、思わずさげびました。

「なに！」

太刀川軍医の細い目が、鋭く私をにらみつけました。

「看護婦のくせに、なまいきな！」

その言葉と同時に、私の頬は彼の手で激しく叩かれました。

「やめてください。女に乱暴はしないでください。いくら戦争に負けても、ここにはまだ、軍隊の規律は残っているはずですよ！」

婦長さんは、敢然と抗議しました。

「馬鹿いえ。日本の軍隊はな、もう滅びたんだ。お前ら、あまつちよろい考えでいると、ソ連兵のために、その身体をめちゃくちゃにされるぞ。奴らが狙っているのを知らないのか！」

せせら笑いながら、太刀川軍医は、そんなことをいうのです。女子にむかって、なんとという理性も知性もない言葉ですよ。

「太刀川軍医どの、あなたは卑怯です！」

あまりかねたようにさげんだのは、看護婦の中でも、もっとも若い笹井久美さんでした。まるい頬が紅潮しています。八名の看護婦全員が、寢床の上にすわりなおし、両手で毛布をつかんで、軍医一人をにらみつけるような格好になっていました。

「笹井さん、お口がすぎます」

と、さすがに婦長さんは、久美さんをたしなめました。しかし、卑怯者とののしられて、太刀川軍医の顔は、みるうちに赤くなりました。それから激しい怒りのためか、こんどは血がひいて青くなったのです。

「三原婦長、島木、笹井、お前たち三名、朝食後すぐ薬品倉庫までこい。訊問したいことがある。いやだというのなら、ソ連軍の将校に実情を話して、お前たちを取り調べる正式の許可をとるぞ。どんな許可でも、おれがそういえば、すぐとれるんだ。いいな、わかったな」

太刀川軍医は、眉をつりあげてそう命令すると、靴音あらくひき返していきました。

婦長さん、私、久美さんの三人は、蒼白になった顔を、思わず見合わせました。

3

薬品倉庫といっても、別棟にある木造の小屋で、もとは物置きだった老朽の一室でした。

婦長さんと私、それから久美さんは、仕方なく、連れだつて、その倉庫へいきました。

太刀川軍医の命令にそむくと、あとがおそろしかったからです。

あることないことをソ連軍に悪意をもって告げ口されたら、看護婦全員の身に、どんな危険がふりかかるか知れませんか。

「よくきたな」

太刀川軍医は、蒼白な顔にニヤリとうす笑いをうかべました。

みると、軍医のそばには、土屋伍長が立っています。この土屋伍長は、内地では、なんとか組の博奕打ちだったとか

で、乱暴な性格の男でした。私たちは、かげで、彼を鬼伍長と呼んでいました。

「なるほど。こいつら三人ですか。どいつもこいつも、なまいきなツラをしていやがる」

土屋もと伍長は、ひげだらけの顔で私たちをにらみました。背を猫のようにまるめて、私たちの襟もとをのぞきこむような格好をしました。

私はゾッとして背すじにつめたいものが走りしました。



太刀川軍医が、ソ連軍にへつらって、うまい汁を吸っているように、土屋伍長は、この軍医にとりいって、タバコやら黒パン、じゃがいものスープやらのおこぼれにすがっているのです。太刀川軍医とは、親分子分といったような間柄なのです。

「太刀川軍医どの、私たちになんのお調べがあるのか存じませんが、お早くお願い致します。私たちには、毎日の任務がありますので——」

婦長さんは、臆せずにいいました。立派な態度だと思いました。

だが、軍医の鼻のさきは、フフンと冷笑して、「心配するな。お前たちのことは、すでに院長に届けてある。きょうはもう、患者の面倒をみる必要はない」

そういうと、こんどは土屋伍長にむかい、

「おい、土屋。これから訊問をはじめ。まず、この三人の女を、逃げられないように縛りあげるんだ」

おそろしい命令をしたのです。

それをきいた私たちは、思わずアッと悲鳴をあげて逃げようと思いました。

しかし、土屋伍長のふとい腕が、私たちの襟首をつかんでひき戻し、それから足で足をからめて床の上に倒しました。起きあがろうとする腰を、堅い靴の底で、なんども蹴りつけるのです。私たちは床の上に蛙のようにつんのめりました。

恐怖と、膝を打った痛みのために、もう抵抗する気力がなくなってしまうました。私たち三人の看護婦は、伍長と軍医の手によって、たちまち縄でうしろ手に縛りあげられてしまったのです。

まるで荷造りでもするような手荒らさでした。縄がぎりぎり腕にい食こんで、私はうめきました。もう逃げることはできません。

入口の頑丈な板戸が、ぴたりとしめられ、外からあけられないように、内側から錠がおろされました。

「な、なにをなさるんです、乱暴な！」

婦長さんが、唇をふるわせて激しく抗議しました。

だが、軍医は冷酷なうす笑いをみせるだけでした。私たちは縄尻をとられ、床の上に膝を折ってすわらせられました。まるで罪人でした。

「さあ、白状しろ。お前たちは共謀して、志村衛生兵を逃がしたんだろう。一人の勝手な行動が、この収容所の全員にどんな迷惑を与えるか、それを知らないお前たちでもないだろう。誰と誰が共謀して手を貸したのだ。白状しろ！」

太刀川軍医の訊問がはじまりました。無理な質問です。私たちは本当になにも知らなかったのです。

「知りません」

婦長さんが、きっぱりとこたえました。

「とぼけるな！……きさまら、おれを馬鹿にしているらしい

が、おれは、こんな満州の片田舎へくるまでは、上海^{シャンハイ}の憲兵隊付きの軍医だったんだ。日本の憲兵隊の拷問のやり方を、なんども見て知っている。いつまでもシラをきる気なら、憲兵がした拷問と同じやつを、お前らにもしてやるぞ！」

軍医は、にくにくしげにそういつて威嚇しました。

そして、土屋伍長に顎をしゃくって合図のような目を投げました。鬼伍長は、齒をむきだすようにして笑い、うなずきました。

4

博突打ちあがりの伍長は、婦長さんの背後へまわり、その縄尻をつかむと、婦長さんの腰を椅子の上にひきあげました。そして、余った縄尻で、椅子の背と婦長さんの胸とを、ぐるぐる巻きに縛りつけたのです。

「あッあッ、やめてッ、やめてください！」

婦長さんは肩をふるわせてさけびました。やわらかい胸の部分に、縄をかけられてはたまりません。立つこともできないのです。

「ヘッヘッヘッ」

鬼伍長は舌なめずりして笑いました。鬼伍長の手が、婦長さんの白衣の裾をつかんで、大きくまくりあげました。

同性の私の目にも、まぶしいように白い太腿が、サッとあ

らわれました。私は思わず顔をそむけました。なんという屈辱！

軍医と伍長が、卑しい^{いや}目を見合わせて笑いました。

「口を割るまでは、身体にきいてやるんだ。遠慮なくびしびしやれ」

軍医が残酷な命令を与えました。

鬼伍長の右手には、いつのまに用意したのか、長さ八十センチほどの竹の棒が握られていました。先端が割れて、ささらいになっている竹です。

鬼伍長は、そのささら竹をふりあげて、婦長さんのむきだした腿を打ちすえました。

肉を打つ残酷な音が、うす暗い倉庫の中にひびきました。婦長さんの胸が大きくのけぞってふくれました。私は目をつむりました。

「ううーッ！」

という、婦長さんの悲痛なうめき声が、私の耳をつんざきました。

「さあ、どうだ」

つづいて、ささら竹の音は、びしびしとはね返って鳴りました。婦長さんの太腿をはじく音です。身の毛もよだつような陰惨なひびきでした。素肌の上を力まかせに叩くのですからたまりません。痛みは骨までも届き、婦長さんは背をのけぞらせて身もだえました。

「ぐっぐっぐっ……」

という、まるでニワトリがしめ殺されるときのような悲鳴をあげて、婦長さんの顔が天井をむきました。

「白状しろ！」

「知らないものは……知りません！」

とぎれとぎれの息で、婦長さんはうめきました。

「やめてッ、婦長さんをいじめるのは、やめてください！」

私はさけびました。が、すぐに肩先を軍医の靴で蹴られて横倒しにころがりました。私はうしろ手の身を必死に起こして、婦長さんを見守りました。

また陰惨な音をたてて、ささら竹が打ちおろされました。

椅子の脚が、ガタガタとゆすれて鳴りました。婦長さんの白い太腿には、ふといみみずばれが、何本も赤くふくれあがりました。

悲鳴やうめきを洩らしても、婦長さんの口からは、けっして拷問に負けた言葉はでませんでした。

「強情な女だな。もっと肌をむかれて、なぐりたいのか。

なめるなよ。おれはな、いまならお前に、どんなことでもできるんだぞ。どんなことでもな、ウフフフ……」

太刀川軍医は、不気味なつぶやきを吐きました。

そのとき、私は突然ある噂を思いだしました。いいえ、噂だけではありません。そのことは私も目撃して知っていました。それは、半月ほど前に、この太刀川軍医が婦長さんに対

し、いやらしいふるまいをして、こっぴどくはねつけられたという噂です。

軍医という重い職務にありながら、酒を飲むと看護婦の身体に手を這わせる癖があるのでした。

私も、この軍医に、胸や腰のあたりを撫でられたことが、二度や三度ではありませんでした。しつこくて、とてもいやらしい手なのです。

わかった、と私は思いました。

(太刀川軍医は、私たちにはねつけられた仕返しを、いま、やっているんだわ。これは軍医の腹いせであり、私たちに対する卑劣な復讐なんだ!……)

と、私は気がついたのです。

なんとという卑劣な男! 恥知らずな男!

これが三カ月前まで、日本帝国陸軍の名誉ある軍医として尊敬してきた男なのか。

私は唇を噛んで太刀川をにらみあげ、くやしさに胸がちぎれるほどでした。

しかし、背中に縛りあげられた私の両腕は、どうにもなりません。縄が両手首にぎっちり食いこみ、ゆるめることもこすり合わせることもできないのでした。手首や腕だけではなく、胸にかかった縄は、針金のように堅く、呼吸を圧迫して、私は次第に苦しくなっていました。

いくら責められても、知らないことは知らないというより仕方がありません。

この拷問の苦しさに負けて、もし「志村衛生兵の逃亡を手伝った」などと言ってしまったら、それこそ、ソ連軍に銃殺されてしまいます。

だから私たちは、どんな屈辱にも耐えて、無言を守らねばならなかったのです。戦争が終わったというのに、死ぬのはいやでした。

沈黙をつづけた婦長さんは、ついに裸にむかれました。そして、この倉庫の中央に立っている柱に縛りつけられたのです。はげしい屈辱のために、婦長さんの顔色は死人のようになっっていました。

婦長さんの年齢は二十七歳でした。むろん独身でした。同性の私が見て、うらやましいと思うほど、色白の、きめこまかな肌をしておられました。乳房のふくらみも、腰のまるみも、したたるようなみずみずしい張りをもっていました。

ソ連軍の監視のもとに、あらゆる不安と緊張が満ちている病院内で、婦長さんの身体のかくよかさは、神秘的に思えるほどでした。やはり、環境にくじけない若さというものでしょうか。

しかし、その美しい裸身に、鬼伍長のムチは、なおも容赦なく打ちおろされたのです。

ささら竹は、びゅんびゅんとはじき鳴りました。婦長さんの乳房に、腹部に、腿に、赤いむごたらしいムチが、縦横にしみつきました。

ムチがうなるたびに、婦長さんは背を折りまげ、うめきを嚙んで苦痛を耐えようとしますが、胸の縄がぎゅぐゅと柱にくくりつけられているので、身動きがならないのです。

苦悶にけいれんする婦長さんの裸身をみつめて、二人の男の目は、楽しみの色をうかべていました。

「もっと打て、もっと叩け！」

太刀川軍医がけしかけました。声がうわずっていました。なにかの快感に酔っているというような表情でした。

鬼畜のような男！これが医師だろうか。この卑劣漢に、医師という人間愛に満ちた職業が与えられている。私は、そのことに憎悪を感じました。

やがて婦長さんは「ひいッ」と、ひと声絶叫し、首を前に落としました。とうとう気を失ってしまったのです。

そのとき、たまりかねたように、笹井久美さんが声をあげました。

「鬼！ けだもの！ 人殺し！」

久美さんは、恐怖と怒りに肩をふるわせ、狂ったように髪を乱して、軍医をのしったのです。唇が、ひきつっていま

した。

「なに！」

ききとがめて、太刀川軍医の視線が、婦長さんから久美さんにむきました。なめるような目で、じろじろと見まわしました。

「土屋、こんどはこいつを裸にして、柱に縛りつけろ！」

軍医は命令したのです。

婦長を気絶するまで責めたのに、それだけではまだ足りずに、まだ、十八歳の見習い看護婦の久美さんに、嗜虐の矢をむけたのでした。

嗜虐。そうです、これが嗜虐でなくてなんでしょう。

太刀川軍医の胸中には、もう逃亡捕虜に関しての詮議せんぎなどはなかったのです。

そんなことは、もうどうでもよかったのです。

あきらかに軍医と土屋は楽しんでいるのでした。訊問に名を借り、看護婦の肉体を責めさいなむことによって、自分のたちの異常な欲望を満足させているにちがいありません。なんとという醜い欲望！

6

久美さんは、たちまち素裸にむかれて、婦長さんがくくら

れている隣の柱に縛りつけられました。

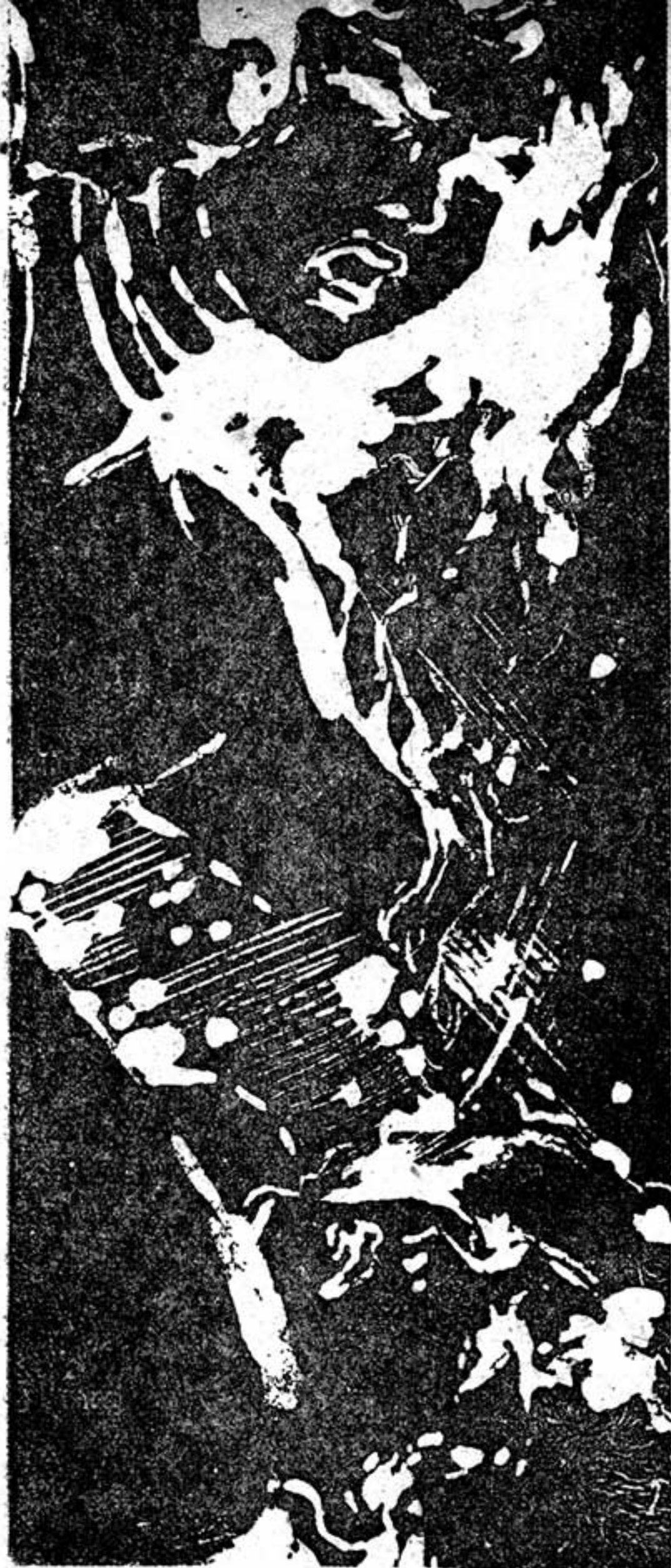
こんどは両腕で柱を抱きかかえるようにして、両手首は前で堅く一つにくくり合わされたのです。

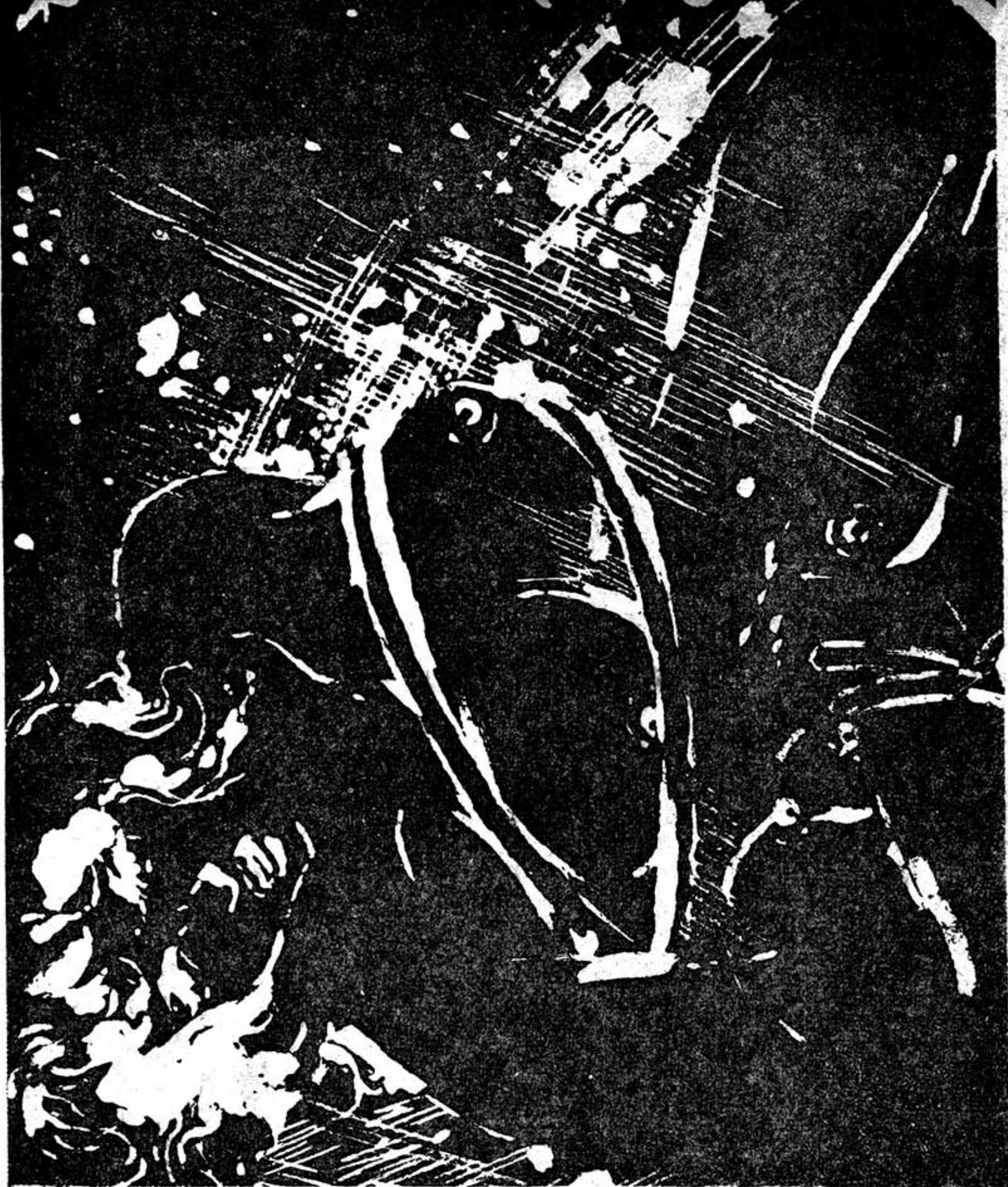
そのおかげで、前面の羞恥は隠すことができましたが、背面の、ことに腰部の盛りあがりのすべてが、さらけだされました。

「へへへッ、でっけえケツだな」

鬼伍長が卑しい高笑いをあげました。

若いだけに、それはたしかにピチピチと生気にあふれた、ゆたかな肉づきでし





た。

「やめてッ、ああッ！」

柱を抱いたまま、久美さんの背中がも
だえました。白い大きな虫のように、柱
にかじりついて身をよじりました。

「そのたっぷりしたところを、思いきり
ぶちのめしてやれ。裂けて血がでるほど」
太刀川の命令は、どこまでも残忍でし
た。

久美さんの泣き声が、倉庫の中いっば
いにひびきわたりました。この倉庫は、
老朽ながらもふとい材木を組み、壁も厚
く塗ってあるので、悲鳴が外に洩れるこ
とはないのでした。だからこそ、彼らは
この場所を選んだにちがいありません。
ささら竹は、空気を切って久美さんの
素肌に鳴りました。ささらの部分がい
っそうこまかく割れて、すべすべとまる
い腰に、ばさりッ、ばさりッという非情
な音で食いこみつづけました。

そのたびに久美さんは「ヒイッ、ヒイ
ッ」と身をくねらせ、痛切な悲鳴をあげ
ました。しまいには、人間ではなく、な

にか牝獣のような声で吠えるのでした。

「馬鹿。そんなに大げさにわめくのはよせ。そんな脂肪をいくらなられたところで、こたえるはずはない」

軍医は唇をまげて笑うのです。そして、なおもきびしくムチ打ちを命じました。

うす桃色の小山のようなお尻に、数条のムチ痕が、むくむくとふくれあがりました。

ななめに、横に縦に、背にも肩にも首すじにも、赤紫色のむざんな線は、交差してしみつきました。その線は、やがてふつきれて、赤い血が流れだしてくるのでした。

「ヒイ、ヒイ、ヒイ」と、肩と咽喉でしゃくりあげ、もう満足に悲鳴をあげる力もなくなって、久美さんは柱に縛られたまま、ムチを受けるだけでした。

私はもう見ていることができなくなりました。

「お願いです。もうやめてください。同じ日本人同士で、そんなひどいことをするのはやめてください！」

私は、縛られた胸を、床にひれ伏すようにして哀願しました。目からは涙がこぼれ、私はむせび泣いていました。

ひどい、あまりにもひどい！

占領軍であるソ連兵によって恥ずかしめを受けるならまだしも、同じ日本人の手で、このような屈辱を加えられる口惜しさ、なさけなさ。

私には、太刀川や土屋の姿が、人間の皮をかぶった野獣そ

のものに見えました。

「へん、どうせあと一カ月もたちや、おれたちはシベリア送りだ。女の肌も痒めねえ、雪と氷ばかりの遠い国へひっぱりだ。女も男も、楽しむのはせいぜい今のうちさ」

土屋伍長は、吐きすてるようにそんなことをいうと、婦長さんと久美さんの肌を、目でなめまわすのでした。

この男たちは絶望し、ヤケになっているのでした。鬼伍長は、また、ムチをふりあげると、狂ったように久美さんの裸身を叩きはじめました。

叩くだけではなく、脇の下へこじいれて、ぐりぐりとねじったり、脚の間にさしこんで左右にゆすったり……。

博徒あがりの伍長は、上衣を脱ぎ、シャツ一枚になって責めつつけるのでした。額から汗をしたたらせるほど夢中になって、獣欲を満たしているのです。

まもなく、久美さんもがっくりと顎をのけぞらせて失神しました。無理もないことでした。十八歳の白衣の乙女と、女ざかりともいえる婦長さんが、素裸にされて柱に縛りつけられ、同じように首を垂れて気絶している光景は、現実のものとは思われず、私は悪夢のなかにただよっているのではないかと思いました。こんなおそろしい体験は、あの激しい戦争中といえども、一度もありませんでした。

乳房の間に柱をはさんだまま、力を失ってもたれこんでいる久美さんの姿は、背面いっぱいから、血をフツフツとふき

だして、凄惨そのものでした。

それなの、男二人の表情は、相変わらず微笑をうかべ、目には快感や陶醉の色さえチラチラと燃やしていました。

戦争は人間の欲望をゆがめるといわれますが、そのゆがんだ獣欲が、私たちに襲いかかるとは、夢にも想像できませんでした。

7

そしてつぎに、私が彼らの犠牲になる番がきたのです。

前の二人と同じように、一度縄を解かされて白衣をむしりとられ、下着までも剥がされました。

このとき、私の身体も気力も、すでに疲れ果てていました。恐怖と屈辱にまみれて、私は死んだようにぐったりとなり、彼らの手にもてあそばれるままでした。

私の四肢は、こわれたテーブルの上に、人形のように縛りつけられました。仰向けにされて、身体じゅうに縄をかけられました。

「そうれ！」

かけ声とともに、ささら竹が私の全身を突きなぶりました。私は目をかたくとじ、奥歯を噛みしめました。

「みる、このふてぶてしいツラを。この女が一番なまいきなんだ。かたわになるくらい痛めつけてやれ！」

軍医の声が、悪魔のようにひびきました。

苦痛をとり越して、私の全身は火のようになりました。死んだほうが、どれほどラクかわからないと思ったほどでした。

私は、すぐに気を失ったのです。すると軍医は、
「まだ気絶するのは早いぞ」

といって、手術用のメスを、私の内腿に突き刺したのです。

鋭い疼痛に、私は息をふきかえします。腿に血の流れを感じました。するとまた、残忍な悪戯(いたづら)がはじまるのです。彼らは、私に気絶する自由すらゆるさなかったのです。メスは私の内腿に数度突き刺されました。

私はこのとき、よく発狂しなかったものだと思います。

自分の身に加えられた拷問には、こまかい記憶はありません。猛火の中に投げこまれたような地獄の苦しみに、無我夢中でのたうちまわっていたのです。

私は胃の中から、いくどもにがい水を吐きだしました。目の前に、いくども青い火花が散り、キナクさいにおいが鼻のさきをよぎったことをおぼえています。

半死半生になり、私はとうとう、気絶したままになりました。

それから、私たち三人の上に、どんなことが行なわれたか。それは、わかりきっています。私たちは、飢えたオオカミの前に横たわる、三匹の裸ウサギだったのですから。

私たちは皮を剥がされ、肉をむさぼられ、骨までもしゃぶられたのです。

気がついたとき、私は病棟のベッドに寝かされていました。全身の隅々が、内部までも疼痛がしみわたり、寝返りをうつこともできません。

隣のベッドには、久美さんが、紙のように白い顔で寝ていました。

そして久美さんは、嗚咽しながら、婦長さんが舌を噛み切って自殺したことを、私に教えてくれました。

私は茫然として、涙もでませんでした。

（自殺したんじゃない。婦長さんは殺されたんだ、あいつらに！）

私は、おなかの底から怒りを感じました。

（殺人鬼！）

胸のなかで、あの卑劣な二人の男をのしりました。

その太刀川軍医と土屋伍長は、それから十日もたたないうちに、ほかの捕虜たちと一緒にトラックへのせられて、柳屯收容所からどこかへ出発していきました。

凍てついた灰色の空から、粉雪が舞い落ちてきた寒い朝のことでした。シベリア送りという噂でしたけれど、はっきりしたことはわかりません。

太刀川は、医者および通訳としての利用価値を買われて捕虜とともに連れていかれたのです。皮肉なことでした。

忌わしい悪夢の日から、十五年の月日が流れ去りました。

私は無事に日本へ送還され、良縁を得て妻となることができました。けれど、妻とはなっても、母となることはできない身体になっていました。

あの二匹の野獣が、執拗にくりかえした醜欲のために……。悪夢といい捨てるには、あまりにもおそろしい強烈な現実でした。

すべては戦争のため、戦争がなした罪悪だといわれます。たしかに、そうにちがいないのですけれど、私にはどうしてもゆるすことができません。この憎しみを忘れることはできません。

敗戦の悲しみを受け、異郷の地に抑留よりゅうされた同じ境遇の日本人の手によって加えられた傷痕なのです。

あの男が、いまこの日本の土の上に生きているとしたら、私がそれを発見したら、ただちに私は告発するでしょう。

なにをいまさら昔のことを、と人に笑われるかも知れませんが、もう時効になっていると言われるでしょう。しかし私は、なんらかの形で、彼に復讐をとげずにはいられないのです。これが女の執念です。

もと陸軍軍医太刀川忠一郎、本年四十三、四歳。面長、細い目、左顎の下に、るいれきの手術痕あり。この男は殺人犯なのです。

毛焼きと髪吊り

——中国戦線で行なわれた女に対する拷問——

昭和十六年の太平洋戦争の最中、支那大陸では、土匪勢力に第八支隊（俗にパードとよばれていた）と名づけるゲリラ隊が神出鬼没の活動をしていた。日本軍が本気になつて進撃すれば、雲を霞と逃げ、そこらの百姓姿に早変わりして、何くわぬ顔で土を打っている。

そこで部落を襲撃して、百姓という百姓を全部ひつとらえていく。女や子供はワアワア泣きさけび、農民は昔からここで畑仕事をしているのだといって抗議する。

ところで、このとき、二、三の兵隊が、民家に押し入り、女をつかまえて暴行すると、うっかりすると軍紀の犠牲になりかねない。というのは、これがバレた場合、あいつだけがうまいことをしたという潜在嫉妬から、軍紀をみだしたといつて、厳罰に処せられるのである。

ところが、これはイケルという女がいると、一応スパイという名目でひつたて、これにリンチをかけるのだ。

まず女を裸にして木にくくりつけ、性毛の部分に火焼きのリンチをしていく。これには二つの目的があつて、一つは女がスパイであるという自白調書をつくることと、



もう一つは毛ジラミを焼きこらすことだ。

たいていの女は、ヒイヒイと悲鳴をあげて思う通りになつてしまふ。従順になれば部隊の慰安に利用し、いらなくなるとスパイの調書を口実に始末してしまふ。毛ジラミ退治は、慰安用のときの用意であるし、自白調書は、リッパな処刑の理由になるワケだ。

この性毛焼きを命ぜられた、あるケヤキ一等兵は、七十人ちかい女を、手にかけた

という。

☆

リンチで最も恐れられたのは、日本の憲兵隊である。ことに、もっともひどい拷問をしたのは、各地区に派遣された憲兵たちである。

スパイの疑いでひっぱられた敵側の女たちは、部隊のやり方よりも、もっとひどい方法で責めさいなまれ、自白をしいられたのである。

女を裸にしたうえに、両手を差しあげさせて頭の毛にしばりつけ、髪の毛の先に綱をむすびつけ、その綱を、天井のハリにひっぱりあげ、爪先立ちにさせるのである。カカトをつけようとすれば頭の毛が抜けあがるほど強くひっぱられる。

こうしておいて、縫い針の先で、女のある部分をチクツ、チクツと突くのである。痛いからもがくと、頭の毛をひっぱられるし、口には、舌をかみ切つて死なないうようにさるぐつわがはめられているから、泣くこともできない。もっとも、声を出したところ、外は支那大陸の広茫たる荒野だからどうしようもないが、声が出ないことは、恐怖と苦痛が体外に発散しないから、むしろ倍加する心理作用があるといわれる。

長期にわたる拷問では、髪の毛を切つて、それで、女のある箇所を責める方法がなされた。髪の毛の刺激で、長いあいだやられると、その苦痛で悶絶するくらいだといわれている。

八番場多計夫

ツケ



離反常ならぬ戦国

天正六年の十月、摂津伊丹の城主・荒木村重は、織田信長に謀反した。村重は、大した豪族ではなかったが、いわば、信長の庇護を受けている大名だった。

当時、つまり天正六年はじめてのことである。織田信長は、宿敵である毛利勢を向こうに回して戦っていた。が、羽柴秀吉を大将とする織田軍に対して、毛利勢は、大坂本願寺と結んで意外に手強かった。このため羽柴勢は、播州姫路に釘づけとなった。

信長は、竜運の一途をたどってきただけに、初めて危機にさらされたのだった。

機を見るに敏なのは、なにも今に始まったことではない、戦国時代の当時でも、大将を裏切り、反旗をひるがえすやからは多かったのである。その一人が、松永久秀である。松永は、信長に反旗をひるがえし、信貴城に立てこもった。だが、それも信長に平定されたのだった。

一方、本願寺の救出を図った毛利軍は、その勢いにまかせ、各地に出兵、上杉謙信と同盟、信長征伐に当たったのである。こうした矢先、摂津伊丹の城主、荒木村重が、織田信

戦国女性受難譜

百二十二人の集団ハリ

美 藤 田 乃 志



長に謀反したのであった。

村重は利発な武将の一人であった。というのは、ちゃんと、動きを算出していたのである。破竹の勢いで攻めたてる信長勢を食い止めるのは、高槻の城主・高山右近と茨木城代・中川清秀の二人であろう。そして、そのうちには、毛利勢が海陸から大坂に進軍、吉川、小早川、宇喜多の軍兵がこれに参戦、織田軍勢と一戦をまじえるだろう。そうなれば、いかに強大を誇る織田軍といえども、勝ち目とはばしい。当然、毛利軍の勝利に終わるものと胸算段。主君、信長公を向こうに回して、反旗をひるがえしたのである。

ところが、村重の賭けは美事にはずれた。あれほど村重が自信を持ち、かつ計算した毛利勢の制勝、そして夢みた野望は、完全に誤算、敗戦の痛手をこうむったのである。

信長は、一カ月後には、高槻城主・高山右

近と、茨木城代・中川清秀を破り、荒木村重の築いた伊丹城を攻めたてたのである。このため、村重は、頼みの綱である毛利勢に援軍を求めた。が、どうしたわけか、毛利勢は来なかった。むしろ、伊丹城は、羽柴、明智両軍にジワジワ圧迫されていた。そうになると、一年近い籠城生活から、嫌気のさした軍兵たちは、日を追って逃亡の数を増していった。さらに兵糧もとぼしく、非難の声が高まっていた。そのときであった。

「毛利軍は、すでに尼崎まで到着している。余がみずから、毛利勢を迎えに参るゆえ、一同、安緒するがよいぞ。もし万一の場合は、城内三千人の数をもち、尼崎に集まることじや。決して早まるなよ。村重の一命にかけても、約束は果たすぞよ」

そう家臣に力説した城主・村重は、五人の武士を従え、城を抜けだして早くも二カ月を過ぎた。だが、村重の姿は、二度と伊丹城には舞い戻らなかった。

「殿は戻っては来ない。このままいれば、われわれは犬死、このさい、殿に会い、善後策を講じなければ、お家老、雑兵は何をやらかすかわかりませんぞ。拙者の考えでは、このまま捨ておけば、城中から崩れおちますぞ」

重臣の一人、柴田一之進が発言した。

「うむ、柴田氏の言わんとすることは、拙者にも、ようわかる。だが、柴田氏、そのためには、婦女子を差し出さねばなるまい。それをも思うと、このわしは……」

「ハッハッハハ、お家老、女の操と男の命はどちらが大切かのう。くだらぬ老婆心は、このさい捨てることと、拙者は思う。のう、千田氏、お主もそう思わんか」

「お家老、柴田氏の言うよう、このさい、女子を織田軍に差し出したほうが……」

重臣たちは柴田一之進の考えに同意した。

こうして、伊丹城の重臣たちは、ついに百計尽きて城門を開いた。

人質の女百余人

伊丹城の人質である婦女子は、八重の方、玉絵の方など村重の側室をはじめ、腰元、女中にいたるまで百余人が織田勢に送られた。

女たちは、まず、老女、女房、娘と三分され、百姓家に押し込められた。

「フッフッフッフ、いい尻をしてるじゃねえか。どうだい、尻踊りをやらねえか」

「そうだ、踊ってみい。早よう踊らんか！」
髯面の武士が、女たちを見回して怒鳴っ

た。長い戦場生活から女に飢えていた。男たちの目が、ギラギラと獣のように好色に光っていた。女たちは、恐怖におののき、互いに抱き合っている。

「佐々木、あの肉づきのよい女をひき出せ」

武士が、酒杯をあおりながら、若い侍に命じた。

「ハッ」

侍は、ずかずかっと女群に近づくと、

「来るのじゃ！」

と、一人の腰元の襟がみを、むんずとつかんだ。

「あッ、お、お許しを……」

若い腰元が哀願した。だが、無駄だった。

畳をひきずられた腰元は、飛び出した荒武者たちの手で荒々しく着物を剥かれた。

「お、お慈悲を……」

全裸にされた腰元は、海老のように五体を折り、必死に哀訴した

「檜山、かまわぬ、その尻を叩け、叩いてみい！」

武士が顎をしゃくった。檜山という若侍がムチを片手に持つと、腰元の尻をめがけて、ハッシと打ち据えた。

「ヒィー」

「ヒェーッ」

腰元の紅唇から悲鳴がほとばしった。みるみるうちに、雪のような白肌が破れ、うっすらと鮮血がにじんだ。腰元は、それでも齒を食いしばり、必死に身を畳に折り曲げていた。その臀部へ、ビシッ、ビシッと、若侍のムチが打ちおろされた。女たちは、目を閉ざし、顔をそむけていた。男たちの目がいっそう淫らな光をました。

「荒田氏、どうせ打ち首にする女、尼崎に着く前に、われわれにもおコボレを……」

「ふッふッふふ、それもそうだな。よし、下郎どもには召使いでもあてがい、われわれで女房と娘を！」

「おい、聞いたか、おのおの方。選ぶがよいぞ、側室、腰元、好きな女を抱くがよいぞ」
ワッと歓声があがった。どっと、うち震える女たちに飛びかかっていった。

「ヒィー！」

「あれ！」

女たちの泣きわめく声が起った。体をねじられ、次々と半裸にされる女たち、それに覆いかぶさる武士の姿は、この世のものとは思われぬ地獄絵図であった。

「無礼な、下がりやッ」

八重の方が、警護頭の髭面の男を見据え、蒼白な顔で座を立った。

「ふッふッふ。下がりや、か。その声を聞きなかったのさ。こうしてやる！」

武士は飛びかかると、八重を押し倒した。

抵抗する八重の頬に平手が鳴った。豪華な衣服の胸を割いた手が、八重のふくよかな乳房を握り、ゆさぶった。さらに、武士は、荒々しく裾を割ると、八重の方を抱きすくめていった。

女たちが、男から解放されたのは、もう夜明けに近いころだった。泣きじゃくるむせび声が、四方からモレるように聞こえてきた。

百二十二人を磔刑に

伊丹城を脱出した荒木村重と重臣数名は、婦女子百余人の人質をよそに、尼崎に立て籠っていた。それへのみせしめなのだろう。翌日、女たちは、京送りと死罪の二つに分けられた。老女や醜女はすべて死罪、美貌の娘や側室、重臣の女房だけが京都へ送られることになった。

そのなかには、摂河随一の美女として、伊丹城主・荒木村重の寵愛を一身にうけていた八重の方をはじめ、家臣のうちでも美人と評

されていた御納戸役・赤堀大膳の一人娘・千鶴など十六人が選出されたのである。

さて、織田信長は、村重へのみせしめとして、人質にとった百余人のうちから、美女を京都に送らせると、その年の十一月、死罪の婦女百二十二人を、七松という草原に刑場を設け、ここで、ハリツケの刑に処することを通達したのだった。

百姓家からひきずり出された女たちは、両手を縛られ、数珠つなぎに、刑場まで歩かされた。

「こらッ、なにをしておる。早よう、歩かんか！」

番卒の棒で尻を叩かれ、よろよろとよろめく女を、さらに六尺棒で臀部をこずき回しては、ニタニタ下卑た笑いを浮かべていた。

やがて、七松に連れ出された女たちは、白木で作られた十字の柱に、両手足を、しっかりと結えられた。髪を乱し、キッと唇を噛みしめる女。幼い娘のはりつけをみて、

「早苗！」

と泣き叫ぶ母親。

「母上さま！」

泣いて母の名を呼ぶ娘。非道をのしる狂人のような老女。これらの女で刑場はごった

「グエーッ」

がえしていた。

「泣け、わめけ、呪うんだ。すべては、貴様たちの城主・村重の罪じゃ。あの世で呪うがよい。それ！」

処刑執行の合図のドラが鳴りひびいた。

はじめに鉄砲の一せい射撃が行なわれた。

このとき、急所を射抜かれたものは、まだ幸いだった。一瞬にして息絶えたからである。

弾丸が急所をはずれたものは悲惨だった。

ハリツケ柱に手足をくくられたまま身をものがいて苦しんだ。

それは、文字どおりの地獄絵巻だ。しかも、その女たちを目がけて、

「ワッッ」

という喚声をあげながら、足軽たちの竹槍が、一せいに、婦女子の胸板を狙い突きに刺し通した。

「ヒイッ」

「グエッ！」

死のうめき声が刑場にこだました。枯れ草は、たちまち、処刑者の血で真っ赤に色どられた。

さらに足軽たちは、女たちをめざして、長刀を抜き放つと、首をはねた。両手を縛ら

れ、逃げ出そうとする女の背をめがけ、グサリ大刀が振り下ろされた。

裾を乱し、草原に転げ回る女の体に、さらに二の太刀が乳房を突き刺した。唇をピクピクとけいれんさせると、女はこときれた。なかには、乳房を切られて七転八倒する若い腰元もいた。裾がめくれ、白い太腿を見下ろしながら、バサリ、その二の腕を切る残忍な下卒もいた。

処刑は日没まで続いた。

牢内の美女

八重の方たち十余名の美女たちは、処刑をまぬがれて京都に移された。死罪をまぬがれたものの、そこに待っていたものは、淫らな男たちの情欲に飢えた目だった。

「ふっふっふ、おぬしが摂河随一の美人か。これじゃ、村重も惚れ込むのはあたりまえじゃ。どうじゃな。どうせ、いずれは打ち首になる体、このわしと一夜の情けを、ウハハハハ……」

牢格子を通し、獄吏は笑いなが、八重の方をなめるようなまなざしで見詰めた。

「それより木村氏、その隣の娘のほうか別嬪でござる。まだ生娘のようだが、拙者なら、

隣の娘を！」

と、もう一人の獄吏が、木村という侍をふり向いた。

「おぬし、目が高いぞ。あの娘は、伊丹城内随一の美女、赤堀大膳の娘で、千鶴という。いい女のわけじゃ。どうじゃな。今夜、わしと二人で、こう、腕の中に……ウッへへへ……」

二人が奇妙な笑い声を発し、八重と千鶴の肢体を見回した。千鶴が必死と八重の方にすがりつくと、肩に顔を伏せた。

「ウハッハハハ、可愛いいう。どうじゃ、あのおびえたまなざし。ち、畜生、この格子さえなけりゃ」

と、格子をゆさぶって笑った。

その晩である。

うとうとと八重と千鶴が寝入っていたときだ。ヒタヒタと牢に近づく足音に、ハッとして八重は目覚めた。

「八重殿とかいったの、内密の用じゃ、来るがよい」

牢格子を覗きながら、八重を呼んだ。昼間の獄吏の一人だった。

「拙者はお主に惚れた。そなたを殺させたくない。そなたとて、まだ先の長い生命、死ぬ

こともあるまい。救ってやる。だが、その代わり一夜でよい、おぬしを抱きたいのじゃ」

武士は、低い声で口早にしゃべった。八重は立ち上がると、男に近づいた。

「本当にお救いくださりますか……」

と、武士を凝視した。

「武士に二言はない。が、拙者の頼みを、そなたさえきいてくれれば。のう、八重殿」

武士は、格子越しに八重の手を握りしめてうながした。

「……」

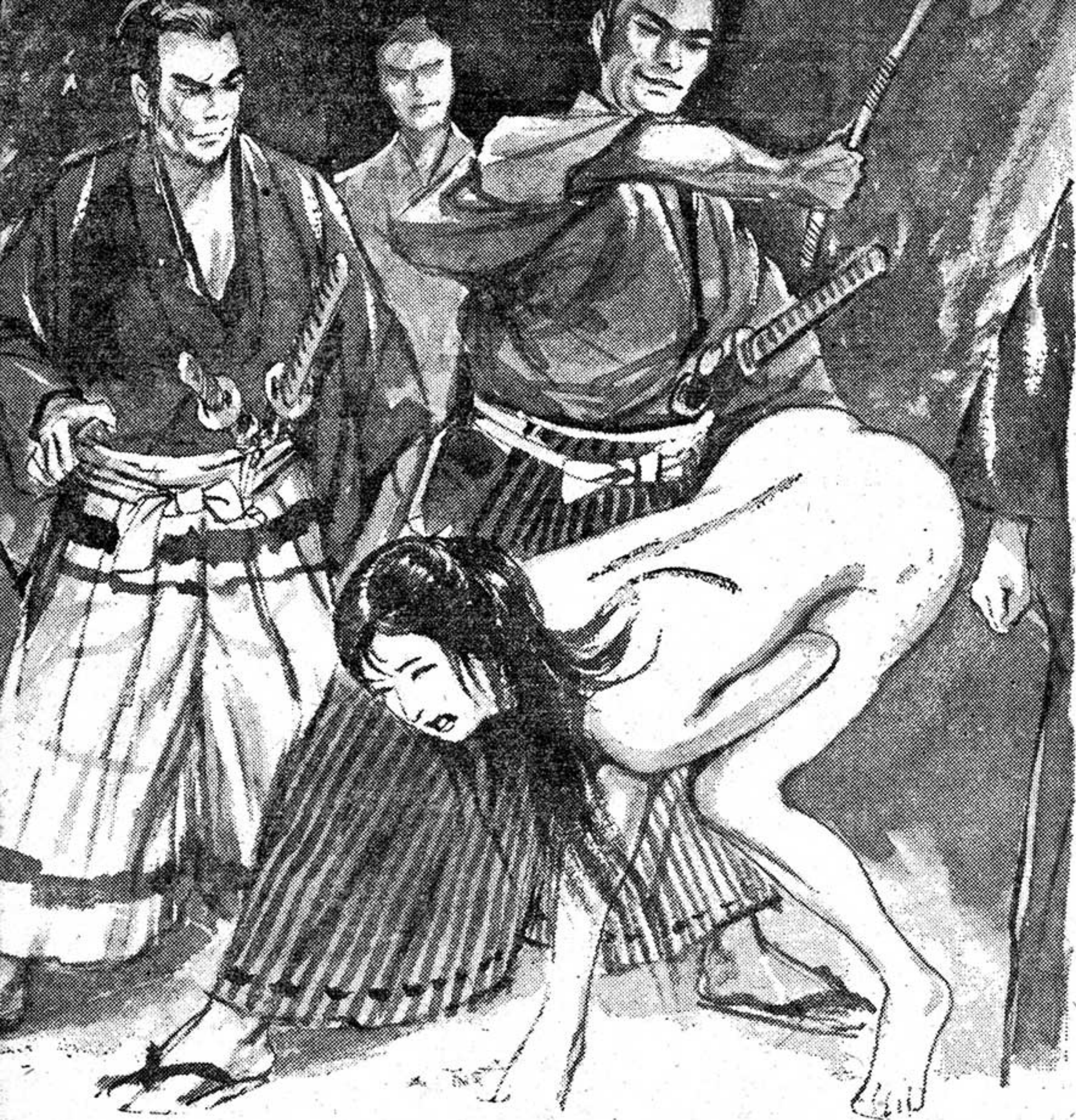
八重は無言だった。が、こっくり合いづちをうつと、武士の手をキッと握り返した。

男は、内ぶところから鍵束をとりだすと、四方に目を配った。カチリ、冴えた音をたてて錠前がはずれた。

「さ、早よう」

武士は、八重の手をとると、素早く牢から連れ出した。千鶴が目覚めた。そのときは、すでに錠を下ろした武士は、八重の方を、小脇に抱えるようにして、その場を立ち去っていた。

「ほんとうに救うてくださるかえ。いえ、あたしを、あなたの妻にしてくださいますかえ……」



小屋に連れ込まれた八重は、体を求めて抱きすくめる武士、小野田竜二郎の手を拒みながら、そう言って念をおしたものである。

「先刻も言ったよう、拙者として武士の一人、二言はないと申すのに。さ、だから、のう、いいだろう」

竜二郎は、ふつふつと五体をたぎらせながら、もどかしく八重の唇を求めた。だが、八重は、迫りくる男の唇を手のひらでさえぎりながら、

「殿方は、どなたでも、女子を口説くときは、そのように、申します。ですから、小野田様も……」

と身をそらした。

「ええ、くどい。手間をとらすな。そのように拒むと、拙者は知らぬぞ。そなたの命も、あと三日。京の町を引き回しのうえ、そなたの美しい顔も、胴から離れるのじゃ。だから、その前に、拙者はそなた、と」

竜二郎は、あえぎながら、八重のくびれた胴に両手を巻きつかせた。

「ほんとに、小野田さまが、わたしを救うてくりやるなら……」

八重は、みずから小野田の口を吸った。竜二郎は、八重の方の胸に手をすべり込ませる

と、やわらかな両の球を、押しつぶすように握りしめた。

「ああ……」

八重の唇から、甘い吐息と、かすかなうめき声が洩れた。

黒じゅすの帯を器用な手つきで解いた八重は、緋の長襦袢一枚になった。小野田は、狂暴に八重を抱きすくめると、荒々しく唇をむさぼり吸った。八重は、それにこたえるかのように、白い両腕を、竜二郎の首に巻きつけていった。

二人はどっと折り重なって床に倒れた。緋の襦袢の裾が左右に割れ、夜目にも白い八重の下肢が露出した――。

やがて、二人の情炎は消えた。

「ほ、本当に、わたしを……」

「くどい！」

「では、あたしを連れて、ここから……」

八重は、竜二郎にすがりついた。

「明後日に連れ出すゆえ、今宵は牢に寝るがよい」

「そ、それでは……」

「心配するな、逃亡には準備が必要じゃ、きつと迎えにゆく。さ、人目につく」

と、竜二郎は、八重の方をせき立てると、

牢に連れ戻した。

そして次の夜も、八重は救われない一心から、竜二郎の言いなりに、物置き小屋で女体をあえがせていた。

美女斬罪

十二月七日、京送りになった女たちの処刑の命令が、信長から出された。

「あの男も、わたしを――」

その朝、八重は、牢格子を見詰めて、キツと唇を噛みしめた。あれほど信じていた小野田の姿は、見えないままに、処刑の日は、ついに来たのである。ダマされたと知った八重は、腹の底から怒りがこみあげた。

「八重の方、出牢じゃ」

刑吏が、女たちを次々と牢から出した。そのなかに、竜二郎が混じっていた。八重の怒りに据わった目が、竜二郎を見据えた。

竜二郎は、八重を一瞥すると、冷ややかに笑った。

「さっさと歩くのじゃ！」

どんと、背中をこずかれた八重は、たたらを踏んだ。

十数人の美女たちは、謀反者のみせしめとして、京の市中を引き回された。どっと見物

人が大道を埋めた。そのなかで、八重の方と腰元の千鶴に、群衆の目が集中した。

「殺すのには惜しい美人だわい」

「いや、まったく」

やじと同情の声が飛んだ。刑場にひかれた女たちは、次々と首をハネられていった。

千鶴も、白無垢姿に血を染めて、斬刑に処せられた。

最後に、村重の寵愛をうけた八重の方が、うしろ手に縛されたまま、ひき出された。八重は、荒ごさすにせられると、静かに両眼を閉ざした。

「用意！」

刑吏の武士が、鉄扇を高々と上げた。若い武士が、大刀に冷水をかけ、二、三度宙に振った。八重は、小袖をはさまれると、うなじを延ばされた。白いうなじのおくれ毛を、寒風が吹き上げる。髪が二すじ乱れ、頬に垂れた。群衆の目が、八重の首すじに集中した。さっ、と刑吏の鉄扇が下りた。

「……………」

ポロリ、八重の首が穴に転がり落ち、首のない胴体が、荒むしろに倒れた。寒鳥が、女たちの死を惜しむように、無気味な声で鳴いていた。

火責め水責めにされた姉妹

——キリシタン信徒に加えられた残虐行為——

島原の天草の乱は、当時の領主・松倉重政の残忍苛酷な悪政に反発して起こった戦いだった。

なかでも、残忍を極めたのは、もと小西行長の家臣で、そのとき津の国の名主与右衛門の娘おたねとおしず姉妹に加えた、代官林兵衛門などの淫虐な仕置きだった。

役人どもは、おたねが妊娠四カ月の身だというのに裸にして、首に木札をつけた。

「この女、切支丹犬なり、信者にあらば、証（あかし）として弄ぶべし」

そして、四ツ這いにして歩かせた。非人やしれものたちは面白がって、下半身を抱えもって姦した。そのために、おたねは両股に血をたらし、苦しみあえいで、ついに歩くこともできなくなってしまうた。

それでも、林代官の手下の者たちは、おたねの首につるした札や、髪の毛をひっぱって無理やりに歩かせ、弓折れで、下半身を打ちたたいて、牢舎まで連れてきた。

そして今度は水牢につれて行き、水責めにした。おたねは腹をかかえて、あえぎ苦しむ、間もなく水牢の中を真っ赤に染めて胎児を流産し、自分も息絶えていった。

また、おたねの妹・おしずは、とって十



六歳の少女。パチレン（西洋人）から、ビルセン（聖処女）、サンタ・マリアにまごうとたたえられたほどの清潔な美貌の持ち主だった。礼拝堂でお祈りをしていたときに、ほかの参拝人たちと一緒に捕えられ、井戸のそばに引き連れられた。井戸の中には、すでに数人の男女が、素裸で立たされ、胸のあたりまで水につかり、両手を天に向けて、神のたすけを求めている。

役人たちは、一せいにおしずのそばにやってきた。そして、着物をぬがせ、下着から腰衣までももぎとって、胴と胸のあたりを荒縄でしばると、井戸に釣り下げた。そして、さぶんと井戸水につけては引き上げ、「どうじゃ、まだ、お上（かみ）にさからうか、どうじゃ、ころぶ（転宗）か」と数十回にわたって責めた。そして、ついには引っぱり上げて地面に転がし、かわるがわる姦した。

まもなく数十人の信徒と一緒にされ、おしずは温泉ガ獄に運ばれていった。火山の火口からは地獄の煙がたえまなくのぼり上がる。その中に信徒たちは、つぎつぎとつきおとされていった。

そこでも若い信徒たちはまた裸にさせられた。一人一人コモをまかれた。そして、それに火をつけ、つぎつぎと、みるまに女たちは火だるまになって、手足をはね、地にころんで狂いまわった。

おしずも、必死に泣きさけび、あやまっただが、手取り足取り、とうとうコモを着せられ、足もとに火がつけられた。

「あッち、あッち」と転げまわった。

おしずは、たえかねて、自分で燃えちぢれた髪の毛をむしり、豊かな胸にわれとツメをたててかきむしった。

「はははは、もっと足をあげい、腰をふれ、踊れ、踊れ！ ビルセンのコモ踊りだ！」

役人たちは、ころげまわるおしずに手拍手を打ち、おもしろがった。八岩崎弘一V

読者サロン



▼小生の拙稿「男に加えられる責」および「男に加えられる珍刑」二編掲載していただき感謝しています。少年のころから男性被虐の読み物や絵画を好んでいました。軍隊生活を長くして、残酷な体験を身をもって味わい、また、そうした光景を目撃するに及んで、一種のエキサイトを感じるようになりました。それだけに、軍隊生活がなつかしく、軍隊が崩壊して戦後久しく、虚脱状態になりました。小生はもちろん、他人から虐げられてエキサイトするマゾでもなく、また、他人を虐げて喜ぶサドでもありません。ただそのような読み物や絵や映画や劇や文献を集めることに趣味をもっているもので、男責めの絵画、写真や文献など、未整理ですが、かなりもっています。誰

に見せることもなく秘蔵していましたが「風奇」のような特異な文献紹介の幹旋をしてくださる雑誌ができたので、小生の久しい夢が実現した思いで、幾編かの作品を寄稿しましたが、掲載の暁、同好の趣味の方のご批評などをお待ちしています。この欄を利用して言葉などいただけると何より幸いです。思います。秘蔵している写真や錦絵、外国の絵画など、折りをみてご紹介したいと思っています。なんにしても、小生のような趣味は、アブ中のアブらしく、女性被虐とちがって、同感者も少ないと思いますが、近代文化が向上してくればくるほど、この傾向は多くなるというのか、性文化のパロメーターだそうで、現にアメリカには、圧倒的に男性責めファンは多いとのこ

とです。

日本に來ている雑誌でも、男性マゾ雑誌は「トモロウマン」ほか五種くらいあり、「マン」ほか幾種かの雑誌では、毎月かならず裸体の男性（たいていは兵士）が捕虜となり、ナチの女性や兵士にむごたしく拷問をうけている絵が必ずはいっているのをみても、読者の傾向がよくわかります。それに比較すると、日本の性文化雑誌でも、女性ばかり取り扱い、男性を取り扱っているものが少ないのは、アメリカにはるか及ばないという感じがします。ねがわくは、「風奇」でもっと積極的に男性被虐を扱ってくださることを切望してやみません。

（東京・芦立鋭吉）

▼私、二十歳になる女事務員です。私がこの本に興味を持つのも、レスボスのことが書いてあるからです。レスボスにあっては九月号を拝見しましたら、浣腸のことが書いてあるでしょう。もう我慢出来なくなつて、筆をとります。

私、浣腸とか、おしめカバー（大人用）のことばを聞いただ

けで、ぞくぞくするほど興奮するのです。いわゆるマニアとでもいうんでしょうね。九月号の「浣腸のいけにえ」は、すばらしい傑作だと思います。筆者の鶴藤恵さんについて、だいぶ首をヒネったんですけど、あなたは男なの、女なの？ ちゃんと判断できませんが、女性……それも二十二、三歳くらい、背の高い、美しい方というのとにして、伶子はいろいろと、あなたのことを空想いたしております。伶子が、あんなかの小夜子になったと仮定して

ただ、ちょっとお聞きしたいことがある。あの浣腸器って巨大な嘴管とだけ書いてありますけど、いったい、どのくらいなの。直径と長さが書いてあればよいのと思うわ。嘴頭部と筒部の両方について書いてくたさればいいのに……せめて、浣腸した薬量を書いてあったらどんなに素晴らしいでしょう。もし、あれが、文面通り円筒状でなく、円錐状ならば、押し出す部分はピストン式のシリンジでなく、ゴム製であるはずね。鶴藤さま、ぜひお答えください。

いませ。
なにしろ、力いっぱい押して
やっとうるくらいいなのですから
嘴頭部だけでも、ビールびんぐ
らい、またはそれ以上の太さに
なるんでしょうし、内容量にし
たって、薬局の店頭にある広告
用イチヂク浣腸器のように、パ
ケツ一杯分くらい、入るわけな
の？ とすれば、なんとまあ、
素晴らしいんでしょう。私、薬
屋さんの前で、それを見るたび
に、一度でもよいから、ほんと
うに、あんな大きいので浣腸さ
れてみたくなりませんの。そ
して、まっ赤になるほどコーフ
ンしちゃって、必要ないときで
も、ツイ、フラフラと買い求め
ることだってあるのよ。
それから、もし私が阿津子だ
ったら、逆さエビのポーズのま
ま浣腸して、そのままいつまで
も我慢させるわ。忍耐の限界は
せいぜい五分か十分くらいしか
ないわね。だけど、決しておト
イレに行かせはしないわよ。だ
からそのままするを足さなければ
ならないの。
そのうえ、小夜子の顔の上で
私も用を足すことにするわ。
そのあと始末は、小夜子の口

をあけさせて、口の中に無理に
でも押し込むか、承知するまで
責めつけちゃうわ。
責めは、何がいかしら？
そうね。木馬、髪の毛吊りとム
チ打ち、股裂きふうなアクロバ
ット責め、逆さに吊るして股間
ムチ打ち、トウガラシをデリケ
ートな所に塗るなど、いろいろ
恐ろしいことを考えています。
そして、胃袋をおトイレにして
しまうの。
もし私が小夜子で、そのよう
にされるとしたら、きつと一ペ
んで阿津子さまを愛しますわ。
伶子って、そんな子なの。エネ
マの奴隷として一生奉仕するい
けない子なの。
そうは言っても、私には、適
当な相手がいないのよ。ですか
ら、仕方なく、自分で自分に、
浣腸して、わずかに慰めており
ますの。
同性の皆様。伶子は、レスポ
スとエネマのクラブをぜひ結成
したいの。そして、最初の被虐
のモデルは私でもかまいません
わ。でも、二度目から、くじび
きということにしたいわ。東京
のどこかの、ある地下室で……
大変恥ずかしいことばかり臆

面もなく書きましたので、あつ
かましい不良少女とお思いでし
ょうけど、本当の私は、トテモ
小心で内気なの。それに、実行
力と勇気がないから駄目ね。お
友だちの間では、私がこんなこ
と考えるなんて、女って魔物ね
だって。私ってとても純情可憐
で清純に見えるんですけど……お
かしくなっちゃうわ。では「風
俗奇譚」のご繁栄を祈りつつ筆
をおきます。読者の皆様ごきげ
んよう。(東京・春村 伶子)
▼涼秋の候、編集諸氏にはま
ますご壮健のことと存じます。
さて、小生、貴誌十月号を初
めて手にしまして、喜びにたえ
ません。とくにグラビアにのせ
られていました「禪をした男」
は、興味深く拝見いたしました。
グラビア説明にあたりましたよ
うに、本当に男性の禪をした姿
というものは、われわれ同性に
とっても、魅力のあるものです。
これから毎月必ず。禪姿の写
真をのせて欲しいと強く要望す
る次第です。
読者欄にもありました、禪
はなるべく角力のまわしみたい
なものではなく、六尺禪、もっこ
禪、越中禪の三種にしていただ

きたいと思えます。そうして、
モデルも、筋骨たくましい若い
われわれ同年輩(十八歳〜二十
五歳くらい)の人びとにして欲
しいものです。小生も現在、ボ
ディ・ビルなどで身体をきたえ
ていますが、よいものです。写
真も、禪をしめようとしている
ところから、禪をしめてこうこ
つとしているところなどを、ま
た、六尺禪をしめてあおむけに
寝て浣腸されているところなど
を、のせていただけたら、幸い
です。
読者欄にもあったように、わ
れわれ男性のなかには、禪に魅
力を感じている者が多数ある、
と思います。小生も現在、二十
四歳ですが、日常、禪を愛用し
ています。禪をきちんとしてた
ときの気持ちは、なんともいえ
ません。一度ぜひ禪特集をして
貰いたいと思います。モデルが
万が一、ないような時には、小生
くらか身体に自信がありますゆ
え、モデルになってもよいと思
います。(長野XYZ)
▼初めてお便りします。長い間
「奇ク」を愛読しておりました
が、はからずも「風俗奇譚」を
みつけて愛読しています。九月



号のグラビア「柔肌責め」は大好きでした。しかし、踏みつけられたモデルの表情が見られないのが残念です。

特集「女装する男たち」は、本当に、貴誌ならではのものです。私も、女装して縛られる責められることにこよなき喜びを感じているものです。時おりある一人の女装マニアの家で、お化粧や女装して縛ってもらい、責めを受けては悦びにむせんでおります。「風奇」でも、こんな女装マニアの責め写真を掲載していただけないでしょうか。案外、女性の責めに興味を

もっている方も多いと思います。それに緊縛感をもっと盛り上げてほしい。目かくしやサルグツワも、一つのアクセサリから、もう一歩つき進んで、本来の働きがうかがえるような工夫はできないものでしょうか。口中に布切れを押し込み、その上からタオルで口を縛れば、ほんとうに声にならぬうめき声しかでないことは、ご承知のとおりです。

つきましては、私の女装した緊縛写真を同封しておきます。マニアと二人でプレイし、撮っていたいたいたものです。もしお差しつかえなければ「風奇」誌上に載せていただいてもかまいません。

(大阪・とし子ハ女装名V)

▼「画報風奇」④を拝見しました。相変わらず豪華な編集で満腹いたしました。ただ二、三の不満を申し上げますと、③号で挿入した男性緊縛写真が全くなかったことで、あの六尺褌をしまった被縛写真がよかっただけに失望しました。今後の編集には必ず二、三ページは掲載してください。オール女性という編集方針は、なんといっても損で、

ソドミアやマゾ系の人には全然買わないという事実もあります。

それから、グラフですが、読み物はなくともよいが、モデル写真以外は、外国の文献にしても、あまりフレッシュなものはありません。最近のアメリカ雑誌には、男性ヌード写真があり、また「マン」その他には男性責め写真に類似した口絵(ときには表紙)がたくさんあります。

写真その他では、大阪のK誌よりも一歩先んじていますが、記事その他はまだお粗末で文献資料的なものはありません。そろそろレギュラー作家をそろえる必要があると思います。大阪のK誌は、表紙その他にずいぶん神経をつかっているようで、あれが、あの雑誌の何百号も続行できる秘訣だと思います。貴誌も、表紙などに女性の緊縛写真の効果としてはよいとしても、いささかドギツすぎて、この種の雑誌の生命をちぢめるような気がします。

あたりさわりのない風俗的な絵のほうが、危険が少ないのではないのでしょうか。(A吉)
▼僕は熱烈な六尺マニアの青年です。褌を常用してから一年た

っていますが、片ときもはずしたことがないくらい、六尺褌に愛着をもっています。先日、店頭で偶然に、貴誌を拝見したところ、六尺褌一本で責められている男の写真を発見して、さっそくに求めました。いつまでながめてもあきない痺姿です。どうぞ、これからも、必ず褌男の責めのフォトを、どしどし載せてください。

それから8月号の読者サロンの吉村氏とぜひ親交を結びたいと思います。同じ若き世代に生きる褌マニアの同士として堅く絞め込んだ六尺褌のように堅い友情を結び、全国の褌マニアの方に呼びかけ、愛褌会を作り、ともに褌復活を叫ぼうではありませんか。(東京・緊縛生)

▼先日、女性の切腹について種ギモンを持った一ファンですが、私自身、愛人を相手に、最近、切腹プレイを行なって、その信びよう性を試してみましたところ、私に関する限り、女性の切腹プレイの真実性を確信しましたので、当日の模様などをかたんにお知らせいたします。私は三十六歳の地方公務員で独身です。私の愛人は同じ役所

秘蔵版風俗画報



「秘蔵版風俗画報」只今、書店で発売中です。

総グラビア百五十余ページの豪華大冊。集録した秘蔵の緊縛フォト三百数十枚、九人のモデルが競って熱演、妖艶凄絶のオール迫真場面。まさに好事家待望の決定版中の決定版です。限定版のため部数に限りがありますので、即刻、本社または書店にお申し込みください。

に勤める二十六歳の女性です。正式に結婚はしておりませんが、月二、三回は肉体関係をもっています。性行為自体よく医学書などに書かれているような変態趣味はありません。私が切腹プレイを試す段取りとしてはじめに「奇ク」と「風奇」をA女に読ませました。緊縛された同性にはさほど興味はもたないようでしたが、髪の毛をひっぱられたり、足げにされて苦痛にゆがむ写真には興味をもったようです。その日はかんたんに縛って転がしておき性行為は行ないませんでした。第二回目は、具体的に、女性のマゾヒズムについて多少、私の

の知るところを話し、納得させましたが、こわいからいやだといいました。しかし、腹部をサラシで巻き、やおらもう一度ほどきにかかると、いくぶん硬直したようでした。第三回目、いよいよ切腹の所作にうつります。当日は、A女がなぜ切腹しなければならぬかを言ってお聞かせました。それは私がA女の夫であること、そして、私の出張中、一夜、凶悪強盗に押し入れられ、豊満な肉体ゆえに犯されてしまったと仮定し、いまだき珍しく、夫への呵責から、みずからの命を絶つという古風な悲劇的なストーリーを設定しました。

夜12時をA女の切腹時刻と決めて、夕方から映画を見たり、お茶を飲んだりして、この世の最後の逢う瀬を楽しみました。11時45分、風呂に行つてすっかり身を清めたA女は、ま新しい下着をつけて正座し、目を閉じて静かに待ちます。

私は、町で買い求めた肉切り包丁の刃先を丸くつぶしたものをA女の前に置き、かりそめに線香を立てました。

12時——静寂ななかに時計の打つ音。A女は、閉じた目をハッとはばたきして、身をよじらせました。電灯を消し、淡い月の光だけが青く白いA女の肌を浮かび上がらせていました。

「覚悟はいいね」

A女はうなずいて、静かに呼吸をととのえました。

正座した太腿を赤い腰ヒモできっちり縛り、A女の背後にまわってシユミーズのホックをはずし、豊かな乳房と下腹部をあらわにしてもむのです。A女はすっかり硬直して、私の指示もまたずに、肉切り包丁をとりあげて、下腹に突き立てました。いかに刃先を丸くしたとはいえ、両手で力いっぱいえぐるよ

うに突くために、相当苦痛をとまなうらしく、苦しそうに、ひたいは汗ばんで、いきむので、私は、力が入った右手をつかんで、右へ右へとA女の下腹を切り開いてゆきます。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」まるで真刀を用いて下腹をかき開いてゆくような凄絶なうめき声に、私自身おどろいたしいです。そして、私の手をしっかりと乳房にあてがって、息づまるように「死ぬッ、死ぬッ」と口走ります。あまりに迫真的な緊迫感に、私はおそろしくなつて、たじろぎました。うつぶし、左手でしっかりと下腹をかきむしり、畳に爪を立ててのたうつ姿は、鬼気迫るものでした。

電灯をつけると、ヘビのように這い、のたうっていたA女はピタリと動きを止めて、まぶしそうに私を見あげました。こうして、A女の切腹プレイは、成功のうちに終わりました。が、現在は、私も興味をもっていろいろ小道具類などをそろえています。次回、和装をさせて、細川ガラシャ夫人の自決を再現してみたいと思います。

(福島・茨木千里)

既刊旧号のご案内

毎号、斯界のトップ・レベルを行く本誌の旧号は、本社に残部が僅少ございます。直接お申し越しください。振替か書留便が、確実にご利用いただけます。

画報・風俗奇譚 第1集

好評のうちに品切れ

画報・風俗奇譚 第2集

(二八〇円)

多色口絵・池畔の愉悦

写真口絵・陶酔する女体八景

第1グラビア

鴨居づり・女の置き物

人間荷物・海老責め・水にひ

たされて・緊縛艶姿・脚立責

め・静かなる悦虐

第2グラビア

椅子しぼり・美囚六態・白い

人魚のもたえ・美しき人柱・

ベッドの残虐・亀の子しぼり

・四つの妖花

第3グラビア

暗闇のよろこび・犬になれ・

木に縛られて・座布団も責め

道具・さかさ海老づり・嗜虐

を待つポーズほか

海外残虐譚

人間をステーキにする

熱砂の砂漠(死の逃亡)

愛欲に狂う氷原の情炎

マゾヒチック絵画館

乗馬服の女たち

創刊臨時特集号 (売切れ)

艶妖特集号 (一四〇円)

多色刷口絵・かぎや店先(春信)

写真口絵・肌の十字架ほか

特集・サディズムの種々相

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の交感心理を衝く

蛇淫の怪(現代怪奇物語)

刑罰人の縄の掛け方(江戸時代)

白人女性を征服した黒人男性

嗜虐への誘い(告白)

女の黒髪に埋もれて死にたい

縄で縛った歓喜の抱擁

仮面舞踏会(伊国・四畳半)

王妃マユラの虐殺(インカ悲史)

種馬にされた男の話

交感演出考(ドサ回り告白記)

明治性的珍聞史②

妊婦を殺す変質魔(ある強殺事件)

犬により快楽を求める女

春の臨時増刊号 (二〇〇円)

妖異・猟奇艶笑特選読物25編

多色刷口絵・老女村岡

写真口絵・捕われの白肌ほか

二色刷口絵・小田利美画集

グラビア・責められる肌ほか

変態性欲考(ある性犯罪の分析)

魔の十三号室

死体を溶かす(科学者の犯罪)

女に奪われた処女

獣婚・女と犬(異常性欲)

舌を噛み切られた男

悪魔に肌を許した人妻の話

猫の怨霊(怪奇小説)

若い女の生胆をとる老婆

会員三百人の男色クラブほか

悦虐特集四月号 (一四〇円)

多色口絵・五彩のサタン

小田利美責め絵集

グラビア・美女緊縛ほか数十葉の

嗜虐編(交感の緊縛圧巻)

特集・鞭打の心理と実相

鞭打の心理(ムチ打ちの極致)

鞭打の歴史ムチ打たれる女たち

鞭打たれる悪魔のイレズミ

鞭打から生まれた愛情

焼け火箸の快楽死(小口末吉の妻)

人間と蛇との交情

地獄尼僧院(おそるべき実態)

火あぶり台の女(印度教徒の殉教)

縛りあげた女の可愛さ

情事の部屋(サド・マゾ)

ピストルを持ったサディスト

夜の淫魔(夏の夜の犯罪)

明治性的珍聞史③

女の死体に憑かれた男ほか

耽美法悦特集五月号(一四〇円)

折込み口絵・空中人魚

口絵・女と動物ほか

グラビア・捕われの人魚ほか

特集・同性愛

同性愛の種類と実際

女性相男子の恋慕手記

同性愛少年が殺人を犯すまで

白い肌同士の陶酔

マゾッホの被虐待契約書

野獣の夜(フォトストーリー)

女の切腹その心理の分析

女だけに加えられる拷問

ハレムの残虐物語

女の肉を食べた男

明治性的珍聞史④

吹上佐太郎の性の異常遍歴

性的イレズミ考ほか

嗜虐陶酔特集六月号(一三〇円)

多色刷口絵・痛ましき祭壇

喜多川歌麿の艶面より

鈴木春信吾婦土産より

グラビア・足づり裸女ほか緊迫写

真数十葉

特集・フェチシズム(淫物症)

マゾヒストの描いた女の絵
ズボンをはいた女たちほか
フォトストーリー・偏奇狂奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
惨憺、目を覆う殺人現場
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
アブノーマル絵画展
鞭打する人々
残酷なる刑罰

画報・風俗奇譚 (秘蔵版)

(二〇〇円)

多色刷写真・まひるの艶肌・盤
上の人魚・柱背負い
多色刷口絵・空中ハリツケ・白
肌への執念・宙吊り
責め絵集・田上恵子・小田利美
・江馬美久の凄艶無残画集

第1グラビア

二人無残・格子にはりつけら
れて・椅子の世界ほか

第2グラビア

裸女キリスト・竹で責める
投げ出された女ほか

第3グラビア

柱しほり・格子責め・異虐図
絵・椅子の囚人ほか
アブチック絵画館
コルセットをする女たち
乳房をしほる女たち

フェチシズムの実態
毛に関するフェチシズム
排泄物に発情する
フェチシズムの源泉は嗅覚
女の下着に欲情する男
変態名画館(珍画・戯画)
浣腸に魅入られた女
変態王・燕山君(朝鮮秘史)
八十七個の洗濯バサミ
マゾヒストの手紙から
マゾ妻・二代目矢作ヨネ
刑罰はどのように変態的か
明治性的珍聞史⑤
黒い通り魔・女の乳房刺し
変態見世物絵まくり
レスボスの日ほか

薫風特別号・夏の臨時増刊

(一八〇円)

多色刷口絵・無残石燈
アト口絵・江馬美久画集
グラビア・デヴァンの狼籍
ベッドの愉楽・受難の姿勢・綾
なすまだら縄・庭園の白魚・逆
さ椅子しほり・裸女無残絵ほか
本誌秘蔵特写フォト百数十葉の
圧巻
世界怪奇残酷秘話
十代の悪の女王・白肌責めの絵
図・愛欲に狂う狼娘・花嫁を突
き殺したサドの夫ほかグロテス

ク読物数編

特集・変態性欲犯罪実録

俺のものをなめろ
淫楽殺人魔ランドリーユー
尼僧強姦魔・大米竜雲
マッチの火で毛を焼いて
サドとマゾ女の無理心中
男性チョン切り事件史ほか

怨差無残特集七月号(二四〇円)

多色刷口絵・落花図絵
口絵・女のプリズムほか
グラビア・恋慕受縛・姐上の白魚
・肌もあらわにほか
海の怪物・山の怪物

特集・食人症

サディズムの極食人症

食人国物語

中国における食人奇譚

人間料理を食べた人々

死を賭けた遊戯(裁判記録調書)

鉄鎖・鉄環・鉄衣装責め

ソドム族(あるソドミアの告白)

若い女を硫酸で溶かす

ムチの下で陶酔する女

女忍者(戦国忍者の残酷秘話)

白肌をう毛虫(時代小説)

変態残酷物語ほか

幻妖異虐特集八月号(二四〇円)

多色刷口絵・緊縛二重奏
口絵・荒れ小屋の残酷・お針子の

受難・ウインチづり・つるべ責め
グラビア・スタンドの美女・柔肌

しほり・竹責め・落花の園・亀

甲しほり・地獄に落ちた男・両

手づり・嗜虐の白肌・こぼれる

妖美・二つ折りほか

特集・レスビアンの実態

東西レスビアンの実体
レスビエヌ

サディストとマゾヒストの往復書
簡(あなたの犬になりたい馬に
なります)

あたしの悦虐プレイ

男に加えられる責め

ひまわり——死体を肥料に

妖怪変化とセックス

化粧室談義(トイレット考現学)

真珠とり海女奇譚

明治性的珍聞史⑦

少年の臀肉切り・野口男三郎

若い女についた死霊

亡霊に復讐された男女

艶美悶悦特集九月号(二四〇円)

多色刷口絵・空中鞭打

原色写真・厳頭の裸女・つるされ

た白魚・女のポーズ

グラビア・裸女無残・落花の景

二人しほり・柔肌責め・静かなる

地獄・投げ出された女ほか

(小説) 永遠の美と若さの泉・

ザッヘル・マゾッホ

画報・風俗奇譚 第4集

(二八〇円)

色刷写真・五輪石塔の前でほか
口絵・白肌針責め・納屋の中ほ
か凄艶緊縛無残画集

第1グラビア

水車に縛られて・水責めほか

第2グラビア

青い無残絵巻ほか

第3グラビア

片足宙づり・縛られた肉塊ほ
か

世界名作秘画誌上展覧会

絵物語・サド・悪徳の栄えほか

画報・風俗奇譚 第5集

(二八〇円)

多色口絵・白い肌のいけにえ他
アト口絵・熱気むしほか、

第1グラビア

憂愁のひと・まひるは静か他

第2グラビア

クサリしほり・ほか

第3グラビア

ピアノのある風景ほか

奇妙な絵画展覧会

絵物語・続悪徳の栄え

絵物語・ワナにかかった令嬢

絵物語・女密輸船

トリックによる残酷フォト

フォト・ストーリー・奇妙な娯楽
ほか

特集・女装する男たち

男が女装するということ

女装マニアとその魅力

女装する男たちの生態レポート
(かびやかずひこ)

マゾヒストの手紙から③

奇妙な再会(アブ・ストーリー)

浣腸のいけにえ(悶える女)

若年における異常の性態

変性男子ものがたり

暗黒街の処刑室(本格的サド小
説)

恋虐呪縛特集十月号

(一四〇円)

多色口絵・女体知恵の輪
色彩写真・美しき囚虜・あかり
も淡く・はなやかな受縛

グラビア・白衣の佳人・石だたみ
の無残絵図・長椅子と女・浴
衣も乱れてほか特写スナップ

特集・サディストの群れ・残酷
なるサディスト・たちあるサ
ドやくざの告白・ネクロフィ
リーの男ほか

私の緊縛の記録

犯罪からみたサディスト

地下室の吊り責め

生きながら焼かれる女

マゾヒストの手紙から④

明治的珍聞史⑧

アブチック秘画展

全身くまなく刺青した男

復讐鬼(本格的サド小説)

裏切りの決算(異色小説)

ほか

編集だより

★：爽涼の秋の机上に「風奇」
の十一月号をおくりします。

本号は「戦争残酷の記録」を特
集しましたが、これは、戦争こ
そ最大規模のサディズムだ、と
いう観点から、鋭意力をそそい
だものです。戦争における残酷
こそ、まさにサディズム、マゾ
ヒズムの泉ともいふべきもので
本号に収録した写真および記事
は、その意味で、必ずや、読者
の皆さまにご満意いただけるも
のと確信しております。

★：いままで本誌には、本格的
なアブ小説がないという声を、
よく聞きました。だが、不言実
行、ここ二、三号前から

掲載しております青山、
獅々村両氏のものなどは
他誌に比肩して少しの遜
色ないものと思っております

ます。ことに本号の獅々
村氏の力作「ひっぶ・え
んど・はいひる」など
マゾの世界の真髄を描破
している、いささか自
負しております。

★：本誌へのご希望、ご
叱正をどしどしお寄せく
ださい。具体的なものに
は、逐次誌面でおこたえ
したいと存じます。

月ぎめご購読の方法

画報・風俗奇譚(各送料とも)

一カ月(一冊) 一八〇円

三カ月(三冊) 五四〇円

六カ月(六冊) 一〇八〇円

一カ年(十二冊) 二一六〇円

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月(一冊) 一四〇円

三カ月(三冊) 四二〇円

六カ月(六冊) 八四〇円

一カ年(十二冊) 一六八〇円

本社直接ご注文の場合は、現金
書留か振替が確実・便利です。

風俗奇譚 十一月号

定価一四〇円

昭和三十五年十月二十日印刷

昭和三十五年十一月一日発行

編集人 高倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一三五

発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番

電話東京(291)二四三〇番